

修士学位請求論文

ナンパの社会史  
～場所と意味の変容～

首都大学大学院 人文科学研究科

社会行動学専攻 社会学教室 博士前期課程

学籍番号 11858109

立石 浩史

序論.....	3
■本論文の構成.....	3
第1章 ナンパとはなにか.....	4
■1-1 ナンパの構造.....	4
▲ナンパの手順.....	4
▲ナンパの目的.....	7
■1-2 ナンパを成立させる生物学的基礎.....	8
■1-3 ナンパを成立させる社会的条件.....	10
第2章 ナンパの社会史.....	10
■2-1 ナンパはいつから存在しているか.....	10
▲資料としての雑誌.....	11
■2-2 1910年代-大正期のナンパ～都市をうろつく不良少年たち～.....	12
▲硬派.....	13
▲明治-大正期のナンパ師とはいかなる存在か？.....	13
■2-3 1960年代のナンパ～おぼっちゃんたちの反抗～.....	13
■2-4 1970年代のナンパ～ナンパの大衆化～.....	16
■2-5 ターニングポイントとしての1978年.....	16
▲学園祭ナンパの隆盛.....	17
▲ナンパマニュアルの出現.....	17
▲ディスコナンパの一般化.....	17
■2-6 1980年代からバブル期まで～ナンパ全盛期～.....	17
▲女性からの関心.....	18
▲高年齢層にもナンパが広がる.....	18
▲有名ナンパ師たちの台頭.....	18
▲メディアナンパの登場.....	18
■2-7 バブル以後の1990年代～メディアナンパとデフレナンパ～.....	19
■2-8 2000年代から現在にかけてのナンパ～暗いナンパと空間の変容～.....	20
第3章 考察：ナンパを成立させる条件.....	21
■3-1 ナンパが行われる場所と意味.....	21
■3-2 ナンパを成立させるイデオロギーはあるか.....	23
4章 不明瞭になった現代のナンパの「意味」理解するために～なぜ彼らは今でも路上に立つのか～.....	26
■4-1 ケース1～自らのポジションに反抗するSの場合～.....	26
■4-2 ケース2～ナンパが手放せないTの場合～.....	27
■4-3 現代のナンパの意味～自己啓発と嗜癖、あるいは逃避～.....	28
■おわりに.....	29

## 序論

1人の男が立っている。銀のロングコートに身を包み胸の前で腕を組んで、渋谷センター街の真ん中で仁王立ちしている。彼はナンパ師である。夜な夜な街に繰り出して、次々に見知らぬ女性に笑顔で挨拶する。ある女性が彼の問いかけに困惑しながらも足を止め、話を聞き始めた。彼らはものの数分でもう何年も共に過ごしてきたカップルかのような親密な笑顔を見せ合っている。そして数時間後には永遠の別れの挨拶をしている。—— 一般的に男女が出会い、互いの距離を縮め、心身ともに結びつき、いずれその結びつきがほどけるまでどれほどの時間がかかるのか。ナンパは一般的な男女の「恋愛」とは比べ物にならないくらいのスピードで、出会いから別れまでを辿る人間の配偶行動である。そしてこのセットを何回も繰り返す人びとが一般的にナンパ師と呼ばれる。本論文はこのナンパ師を社会学的に分析する。

ナンパとは一般的に、主に男性が見知らぬ女性に性的な意図をもってアプローチすることを言う。ナンパを進化心理学的に研究した坂口菊恵によるとナンパは「一般に男性が女性に対して、面識や交遊がないのに性的な意図をもって声をかけ誘うこと」、ナンパされる対象である女性目線からは「女性の受ける、未知の男性からの予期せぬ性的アプローチ」（坂口：2009:6, 20）と定義される。では、辞書においてナンパはどのように定義されているか？実は、日本の辞典において、「ナンパ」とカタカナで書かれたものは少なく、（たとえば『隠語大辞典』）ほとんどが「軟派」と表記される（『広辞苑』『大辞泉』『新明解国語辞典』『日本国語大辞典』など）。『日本国語大辞典』第二版10巻に収録されている「軟派」の項が辞書類において一番くわしいので紹介しよう。

なんぱ【軟派】 [名] (1)意見や主義が軟弱な党派。強硬な意見を主張することができない者。⇔硬派。(2)新聞・雑誌で、社会面や文芸、またはつや物などの記事を担当する部門やその記者。(3)異性との交遊や、華美な服装を好んでする青少年の一派。⇔硬派。(4)（——する）転じて、俗に、街頭で声をかけて異性をさそうこと。(5)取引市場で、相場が先ゆき下落すると見越して売りに出る人々。弱気筋。

本論文が主たる分析対象とするのは、(4)の意味、街頭で異性に声をかけて誘う「ナンパ」である。おおよそ、以下のポイントがその構成要件となる。①男性が②見知らぬ異性に対して③性的な意図をもって声をかけ、短期的な性（愛）的關係を構築していくこと。このコミュニケーションが「ナンパ」として仮に定義することができる。

本論文が分析対象とするのは、このような一般的な意味の「ナンパ」である。もちろん、男性が見知らぬ男性に性的アプローチする場合、女性が女性に、女性が男性にアプローチする場合（最後のものは特に「逆ナンパ」と呼ばれる。）も存在するが、本研究では対象としない。<sup>i</sup>

### ■本論文の構成

第1章では、ナンパの構造とナンパを成立させる基本要件について記述する。論者の意見では、ナンパは生物学的な基礎を持ち、社会的なある条件を満たすことで限定的に生じる社会現象であることを仮説にしている。（これを狭義のナンパと呼ぶ）

第2章では、大正期（1915年頃）から現代に至るまでの日本のナンパの歴史を記述する。どのような場所でのどのようなナンパが行われ、その社会的な意味を探ることを目的にする。

第3章では、前章を引き継ぎ、狭義のナンパが成立する社会的要件を考察する。この章ではナンパから社会をみることを目的にする。その時、キーワードとなるのは、空間の変遷、意味の変容、近代的恋愛イデオロギーとの関係である。

第4章では、ナンパ師それ自体に焦点を当てる。前章までに検討したことにより現代のナンパを社会的に意味づけることは大変難しくなった。それでも路上に立つナンパ師を論者自身のフィールドワークにより記述することが難しい現在のナンパの一考察を記述する。

## 第1章 ナンパとはなにか

### ■ 1-1 ナンパの構造

ナンパとは一般的に①男性が②見知らぬ異性に対して③性的な意図をもって声をかけ、短期的な性(愛)的關係を構築していくこと。であったと操作的に定義したが、これだけだとその内実は明らかでない。このままでは何を具体的に分析するのか定かではないので、まずその基本的なプロセスを記述する。

ここではナンパのワンサイクルを主な行動/対応フェーズに分けて説明する。ここで紹介するナンパ手順はあくまでも一般的なモデルであって、必ずしも以下のようなチャートを辿るわけではない。しかし、このように行動を抽象化し理念化すると、どのようなコミュニケーション・ゲーム、つまり目標とルールが存在しているかが見えてくる。ナンパ師たちが内輪で使う特殊な用語については〈〉で括弧である。

なお、以下は論者は2012年5月から2014年の12月にかけて延べ21人のナンパ師に帯同し、どのようなナンパが行われているかを取材し分析した結果である。

### ▲ナンパの手順

〈声かけ〉＝出会い

ナンパはまず出会うことから始められる。ナンパにおいて任意の場所で性愛対象にアプローチすることを一般に「声かけ」という。この場合、声をかけて相手に取り合って貰える確率はナンパ師(の実力)によって様々だがおよそ数%～十数%程度と低い。そのため、ナンパ師は一回のナンパの機会において往々にして多数の女性に声をかけることになる。またこのような多数のトライアルが傍目には手当たり次第に声を掛けている軽率な行為＝ナンパとして社会的に認知されているであろうことは想像に難くない。辞書の意味としては、「ナンパ」とはこの声かけフェーズのことを指すことが多い。

声かけ目的は相手に認知してもらうことである。この声かけがナンパ師にとって最初のハードルとなる。ナンパ師たちによれば、この声かけが最初の難関であって、このフェーズをクリアできればナンパは半分終わったものと言っても過言ではない。声かけをして相手に認知されることでナンパが始まると言える。道ばたで声かけをする〈ストナン〉やナイトクラブで声かけする〈クラナン〉で細部は違うが基本的には相手の視界に入り、自らを(好)印象づけることが目的とされる。

〈ガンシカ〉＝拒絶

声かけによって相手に認知される段階で相手からコミュニケーションに全く応じられないことをガンシカ(頑としてシカト)という。声をかけてもナンパ師と目を合わせず完全に取り合わない。主にナンパされることに慣れている女性が、ナンパやスカウトなどに完全に応じないことを言う。このガンシカは女性にとって反復学習的な対応であり、ルーチン的な

やりとりになる。ガンシカされたナンパ師は食い下がって、ガンシカ崩しをするか引き下がるかの選択をする。ガンシカ崩しとは声かけを無視する女性にあれこれの工夫をして対応させるテクニックである。この際、ナンパ師は取り合わない女性に話しかけたまま並行に追跡し〈平行トーク〉、身体的な動作と発話で女性にまず立ち止まってもらい〈ビタ止め〉、話しを聞いてもらう環境を作ることに腐心することとなる。

〈なごみ〉＝受け入れの親密性を深める

声かけをして反応を貰えれば、次はなごみのフェーズに移る。なごみとは、声かけ以降の世間話や身の上話などをして相手の女性と仲良くなることである。厳密には仲良くなるのが〈なごみ〉であるが、主にその後、居酒屋やカラオケ、漫画喫茶に〈連れ出し〉たり、個人的な連絡先を得るための橋渡しの役割を担う。相手の情報を知るための質問や、こちら側の感情や意図を伝えることでより親密な会話を成立させる、つまり和むことが後の目的を達成する通過点となる。なごみフェーズにおいて重要視されるのは「盛り上がること」<sup>ii</sup>であり、このなごみ次第で後のフェーズに進めるかどうかが決まって来る。

〈番ゲ〉＝関係性の確保

なごみフェーズがクリアされれば、次は具体的な交渉フェーズに移行する。交渉フェーズは番ゲと連れ出しである。番ゲは相手の電話番号やLINEなどのスマートフォン用メッセージアプリのIDを交換することである。番ゲの目的は声かけ段階が終了したあと、あらためて対象とコミュニケーションを取ることにあり、後のアポイントメント〈アポ〉が具体的な目標となる。ゆえにナンパ師はアポにつながる番ゲを心掛けることになる。ここで使われるテクニックとしては、相手の女性にこちらの電話番号なりアプリIDなどを教え、その場で電話をかけてもらうかメッセージを送ってもらうものがある。こうすることで相手からのコミットメントを得、後のコミュニケーションの確立を上げるというのだ<sup>iii</sup>。また、相手がある場で番号を教えてくれない場合は自分の番号のみを相手に渡す〈ブーメラン〉と呼ばれる行為をすることになる。このブーメランではナンパ師は対象の連絡先を知ることができず、相手からのメッセージや着信を期待するしかないので、後のコミュニケーション確率は下がる。あるナンパ師によるとブーメランを放って返信がくる確率はかなり低い。

〈連れ出し/アポ〉＝更なる親密性の深化

声かけ段階からさらに親密性を深めるために他の場所に一緒に移動することを連れ出しという。手練のナンパ師になると番ゲより連れ出しを優先順位に置くようになる。なぜなら、後日にアポをとってデートするよりも、即、目標であるセックスにつながるからである。会ってその日中にセックスすることをナンパ界では〈即〉と言い、次回改めてデートしセックスに至らしめることを〈準即〉、次々回では〈準準即〉と呼ばれる。ナンパ界において価値が高いとされるのは即準即で、声かけからセックスの時間までが数十分程度の極端に短いものは〈弾丸即〉などと呼ばれたりする。おおよそであるが、ナンパ界においては声をかけてからセックスまでの時間の短さが価値の指標のひとつになる。

ナンパ師は声をかけてある程度の好意的なレスポンスを受けると連れ出し打診をするが、親密性を深めるためにより閉鎖的な空間に移行することを目論む。もちろん、相手との和みのレベルを勘案しながら打診先を選定する。いきなりラブホテルや自室、レンタルルーム(シャワーや簡易ベッドが取り付けられているが、宿泊業の業態をとらない施設)に同行できるなら苦は無いが、大抵の場合は不可能である。ゆえに、それらより開放度の高い場所を選ぶことになる。と言っても、路上での立ち話よりはプライベートな場所に行くことが作業目的

であるので、通常飲食店やカラオケ店などに入ることになる。多少の魅力を感じナンパに付いていくことにしたと言え、相手の女性からすると会ったばかりの男性と閉鎖的でプライベートな空間に行くことは忌避される傾向にあり、多くは開放的な喫茶店、居酒屋などに落ち着くようだ。ナンパ師が示す魅惑度合いや女性の心理状態の如何によっては、よりプライベートな空間に連れ込むことができる。その場合、カラオケ店や漫画喫茶の個室、前述のラブホテルやレンタルルームに行くことになる。その場合ナンパ師にとって〈即〉の可能性が高まることは言うまでもない。

#### 〈ギラつき〉＝性交渉の交渉

声かけ、連れ出しに成功したナンパ師の最終目的はセックスである。ナンパ師は連れ出し先のよりプライベートな空間でセックスを目指すことになる。ここで行われるのは、単なる友好から性交渉への移行である。仲良くしゃべったり、飲んだりするだけではセックスをすることができない。そこでナンパ師は言葉やボディタッチによる具体的な誘惑の行動をとることになる。これが〈ギラ〉や〈ギラつき〉と呼ばれる。ギラつきセックスへの誘惑が上手くいかないことを、〈グダ〉と呼ぶ。相手が「グダグダ」して言うことをセックスに応じてくれないことを指すが、この場合ナンパ師は〈グダ崩し〉をすることになる。セックスに応じるように相手を説得するのであるが、キスをするなどの身体性に訴えるものから、論理的に相手を説得するなどの様々なバリエーションが存在する。見事〈ギラつき〉、上手く誘惑できると、念願のセックスに辿り付けることになる。

#### ■目標はセックス、内容は親密度の向上

ナンパ師が仲間内で使用する用語を紹介しながら、ナンパのプロセスを記述したが、論者が言うまでもなく、プレイヤー自身このようにある目的を達成するためにシステムチックにナンパを捉えている者が多い。

ここでナンパのプロセスについて再度抽象化し、単純にまとめると以下のようなものになる。まず、目標としてのセックスがある<sup>v</sup>。セックスまでの時間やコストは短小である方が望ましいが、相手の都合上困難なものとなる。そこでナンパ師は最終目標につながる中間ポイントを設け、段階的に関門をクリアしていくことになる。目標達成が容易であれば、設けられるチェックポイントも省略されることになる。

トップダウン的に記述すると、セックス（目標）⇨和み（過程）⇨声かけ（認知）となる。ナンパでは、全く相手から認知されていない状態から相手とかなりの親密性を共有している状態まで持って行くことになる。つまり、①セックスという一般的に親密度がかなり高いコミュニケーションを達成するために、②親密性がゼロの状態からセックスが可能なレベルまで急ピッチで引き上げることがナンパだと言えることになる<sup>v</sup>。（図1）ナンパの目的はセックスであり、内容は親密度の向上である。仮に女性がセックスに応じる親密度を10とすると、相手から認知されていない親密度0の状態から親密度10まで上げていくことがナンパの過程なのである。そこでは、親密度の降下・停滞を避けることが努力され（ガンシカ崩し、グダ崩しなど）、親密度を段階的に上げて行くテクニックが駆使される（連れ出し、なごみ、番ゲ）。

図1) ナンパのプロセス



認知

親密度  
の向上

セックス

#### ▲ナンパの目的

ではナンパの目的はなんだろうか？もちろん、見知らぬ女性たちとのセックスであるが、その内容はそのことがよく現れている証言をいくつか紹介したい。

“街に出撃してから帰るまで、どれだけスト高を即れるのか。実力って結局そういうことなんですよ。何件番ゲしたとかそういうことじゃない。もちろん次につなげるために番ゲは重要です。でも、たかだか番ゲをして喜んでいるようじゃナンパ師とは言えない。その辺のサラリーマンみたいに酔って適当にナンパするくらいならいいですけど、僕らはそうじゃないですから。常に結果をどれだけ出すかに重きを置いています。ビジネスと同じじゃないですか？”（K氏インタビューより）

“一回のアポではなるべく節約するようにしています。連れ出し先は安い居酒屋か漫画喫茶かカラオケですかね。一回2000円くらいで済ますこともあります。一人10000円もかけてたら一日何回もできないじゃないですか”（M氏インタビューより）

“ナンパでは損切りが大切。初心者がやりやすいのは会話が盛り上がってるからと言って、ずっとその女性とばかりしゃべって結局即れないこと。時間とお金を無駄にしたくなかったらどこで損切りするかの見極めがちゃんとできないとね”（S・T氏インタビューより）

“ナンパっていうのは最初のスクリーニング作業がほとんどやからね”（K・S氏インタビューより）

おおよそナンパ界においては声をかけてからセックスに至るまでの時間が短いほど価値が高いとされている。さらにより多くの女性をナンパしセックスまで至ったことも仲間内での価値指標となる。さらに一般的に容姿や社会的地位が高い女性を口説き落とすことも目標とされる。例えば、容姿の優れた女性を多くのナンパ師は〈スト高〉や〈スペ高〉（ストリ

ート、スペックの略である)と呼び、点数をつけて後に仲間内で報告し合うこともある。

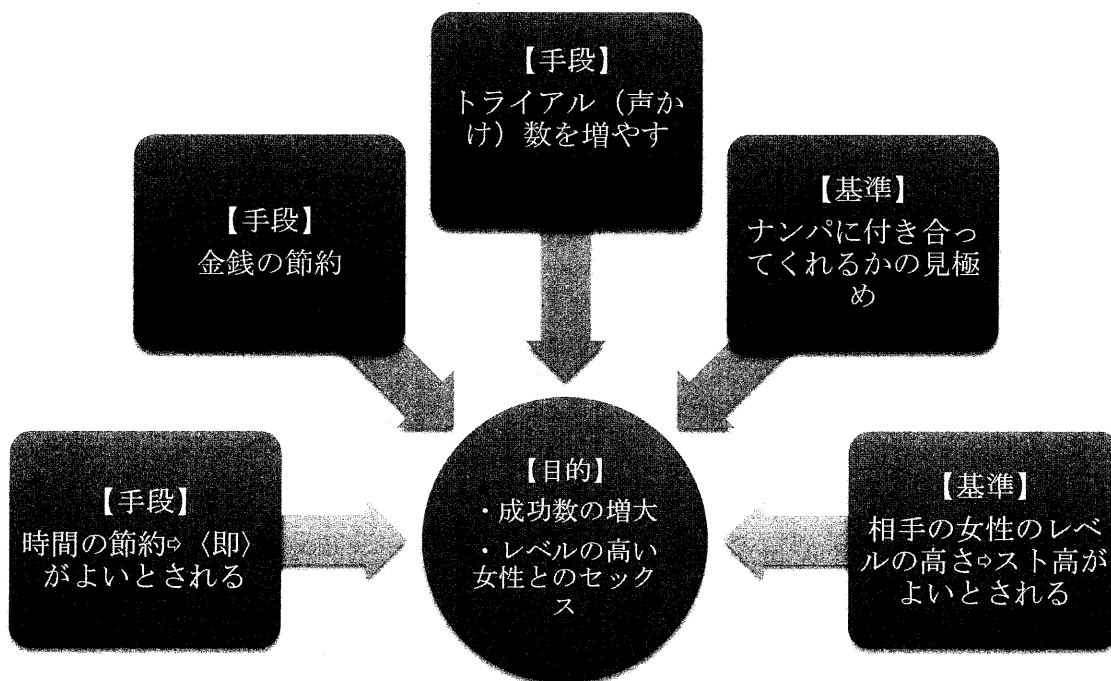
数を稼ぐことが望ましいこととされている中で、できるだけ時間的、金銭的リソースを節約したかも暗黙の評価軸になっていることがある<sup>vi</sup>。あくまでもリソースを節約することは、より多くの女性と関係するための外的条件にすぎないので副次的なものであるが、より短時間でセックスまで至る(即)の価値が高い傾向も見られる。

より多くのナンパを成功させるためにはこれ以上進展できなさそうな相手にコストをかけるのは得策ではない。よってナンパをする際にナンパ師はその女性がナンパに応じてくれ、最終的にセックスできる相手かどうか見極める作業をしている。もしそれ以上の進展が見込めない場合彼らの多くは手を引く。多くのナンパ師はこのことを株取引の用語を流用し(損切り)と呼ぶ。

熟練ナンパ師になるほど、少ないコストでより多くの成果をあげることができるようになる。引用のKS氏が述べるように、(声かけ)の段階でナンパ師は声をかける相手がナンパに応じてくれるかどうか注意を払い、実際にそのスクリーニング能力が高いほどナンパに成功するようである。また、ナンパによくあう女性は短期的に男性とセックスする志向が、そうではない女性より比較的強いことが明らかになっている(坂口:2009)<sup>vii</sup>。ナンパ師はナンパに応じてくれる女性を見抜いているのだ。

このようにナンパ師の間では一般的に、ナンパ成功数の増加、レベルの高い女性をナンパすること<sup>viii</sup>がその目標となっており、より多くの質の高いナンパを成功するために、ひとつのナンパにかかるコストの最小化が目指される。その際、ナンパをするかしないかの判断基準は相手がナンパに応じてくれるかどうか、相手の女性のレベルが高いかどうかである。

図2) ナンパの目的と手段



## ■ 1-2 ナンパを成立させる生物学的基礎

前項ではナンパの手順とナンパの目的と手段を記述し、その大枠が分かった。ではこれら



の行為はいったいどのような条件で成り立つのだろうか。進化心理学者のデヴィッド・バスとデヴィッド・シュミットは1993年に「性戦略の理論」<sup>ix</sup> (sex strategies theory) を打ち出し、ヒトは男女ともに性行動において進化心理学的には短期的配偶戦略 (short-term mating strategy) と長期的配偶戦略 (long-term mating strategy) の2つに大別される戦略を用いていると主張した。短期的配偶戦略とはカジュアル・セックスのようにさまざまな相手と短期の間に性的関係を結んでいくスタイルで、長期的配偶戦略とは結婚のように長期にわたって特定の相手と関係するスタイルのことである。例えば多くの社会において男性の方が短期的配偶戦略に許容的である<sup>x</sup>ように、バスらは男女がそれぞれの配偶戦略を通して解決しなければならない進化上の適応課題は互いに異なっていると述べている。他にも、男性にとって、カジュアル・セックスがもたらす最大の利益は、子孫の数がそれだけ増えることであり、そのため男性にとっては、いかにして数多くの異なる女性とセックスするかということが適応上の課題となってきた。

図3) 2つの配偶戦略とその要点

	男性	女性
短期的配偶戦略	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. パートナー数の増大</li> <li>2. 女性が性的に近づきやすいかどうかの見極め</li> <li>3. コスト、リスク、コミットメントの最小化</li> <li>4. 妊娠力の高い女性の判別</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 相手からすぐに資源を引き出せること</li> <li>2. 長期的なパートナーになる可能性</li> <li>3. 遺伝子の質</li> <li>4. 長期的なパートナーを替えるときの予備</li> </ol>
長期的配偶戦略	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 父性の信頼(投資先が自分の子供かどうか)</li> <li>2. 女性の生殖能力</li> <li>3. 関係へのコミットメント</li> <li>4. 子育てのスキル</li> <li>5. 遺伝子の質</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 投資能力</li> <li>2. 相手の男性が投資する気があるかどうかの見極め</li> <li>3. 身体的な保護</li> <li>4. 関係へのコミットメント</li> <li>5. 子育てのスキル</li> <li>6. 遺伝子の質</li> </ol>

配偶戦略の文脈別、男性・女性それぞれがパートナー選択の際に求めるもの  
Buss&Schmitt (1993) より。

バスらによれば、人間にはこのような配偶上の戦略と要点がある。ここで、人間の男性の短期的配偶戦略と、前項で見てきたナンパ師たちによるナンパの目的と手段(図2)に照らし合わせると、これらの要点はほぼ一致する。逆にバスらが言うところの短期的配偶戦略が、ナンパ師たちの行動基準をそのままなぞっているかのようである。ということは、ヒトは進化の適応上何百万年も前からナンパしてきたと言えるのだろうか? 論者の考えではあくまでもこの短期的配偶行動の志向性はナンパをする生得的な基礎に過ぎない。というのも周りも見れば明らかのように、あらゆる人間の男性がナンパするわけではないし、性行動は個体差によるところが大きいからである。もちろんバスらが提唱している性戦略理論はあくまでも基礎的な理論であって、当てはまらない個体が存在していないことを証明しているわけで

はない。<sup>xi</sup>

### ■ 1-3 ナンパを成立させる社会的条件

日本の社会学的な統計調査によれば、ナンパをする男性は少数であり、しかも時代によってその割合が異なってくる。たとえば、2011年の『若者の「性」白書』の調査では大学生の男子のナンパ経験率は9.8%、女子1.2%。被経験率は男子7.1%、女子40.4%である。今現在でナンパをしている若者は多くて10%程度である。また、1974年の調査では男子経験率29.6%、女子経験率5.9%である（『青少年の性行動』）。進化生物学的には人間の男性は「ナンパ的」なのに、なぜこのような結果が出るのだろうか？生物学的な基礎を超えた差異、文化差や社会的な要因が関係しているのではないか。つまり、ナンパは生物学的な基礎付けだけでは成立せず、社会的な背景がないと成立しないのである。そして前述した通りに、生物学的な基礎づけを超えて成立し、記述され、話される「ナンパ」を狭義のナンパと呼び、社会学が扱えるものとして記述する。

ではいかなる、社会的背景がこの狭義のナンパを成立させるのだろうか。この問いに答えるため、次章ではナンパそれ自体を歴史社会学的に検討する。「男性が見知らぬ女性に声をかけ、親密度を急ピッチで引き上げセックスをすること」という意味でのナンパが、どのようにして社会に登場し、どのように社会にまなざされてきたか、その歴史を記述することによって、ナンパを成立させるもうひとつの重要なピースが明らかになる。

## 第2章 ナンパの社会史

### ■ 2-1 ナンパはいつから存在しているか

日本においてナンパという行為はいつから存在しているのだろうか？フランス文学者の鹿島茂は以下のように指摘する。

日本語にはナンパという言葉が登場する以前には、それを指す言葉がなかったということだ。それどころか、男女の婚前交際が原則禁止されていた時代の日本では、ナンパという言葉が指し示す行為、つまり「男が街頭でいきなり女に声をかけて誘う」という行為もほとんどないに等しかったのである（鹿島：2003）

鹿島が想定する「男女の婚前交渉が原則禁止されていた時代」がいつなのかが分からない限りこの言説の真偽の判定はできないが、鹿島はその後「1970年前後にセクシャル・レボリューションが起こり、街頭で声をかける男とそれに付いて行く女の子の数が一気に増加した」と続けるから、おおよそ1970年頃から本格的にナンパが増えたのだろうと予測していることが伺える。

近代の日本において婚前交渉が禁止されていた時代は戦後～1960年代にかけてであるが、むしろ戦前の日本では恋愛と結婚は比較的分離していた。たとえば上流階級の男性は結婚の外で妾を持つと言った恋愛とセックスの自由があったし、庶民の間では夜這の習慣があった（山田：1996）。鹿島や山田が言うように、戦後自由な男女交際が減少する。その理由は戦時下体制にあったと山田は指摘する。総力戦の遂行のために恋愛や性関係が国家によって統制されるようになったというのだ。その中で強調されたのは家族の秩序や道徳で、家族をこわすような自由な感情（婚前交渉や結婚外の男女関係）はよくないものとして禁止されていく。逆に強調されたのが、「愛情あふれる家族」像であり、親しい関係は家族の中で完結させ、家族の外に出てくることを抑圧しようとしたというのだ（山田：1996）。

このような事実から、おそらく鹿島は1970年代以前の婚前交渉禁止の時代にナンパがほとんど存在しなかったと主張するのであろうが、実際のところ、渦中の1960年代にすでにナンパは存在し、それを指し示す言葉もあった<sup>xii</sup>。また、恋愛が戦後25年より自由だった戦前である1900年代前半にも日本社会にナンパは存在していたのである（鎮唯剣客「墮落學生の硬派軟派」長髪逸士「全國不良學生概觀」共に1915『武俠世界』）。

#### ▲資料としての雑誌

管見の限りではナンパを歴史的に記述した学術研究や書籍は存在しないが、明治時代から現代にかけて膨大な量のナンパに関する雑誌の記事は存在する。最も古いナンパに関する資料は1915年4月15日発行の評論雑誌『武俠世界』における「軟派」に関する記事である。この雑誌では、主に教育系の論客、軍人、ジャーナリスト、ライターが、彼らにとっては問題のある当時の学生を、逸脱者・不良として評論している。

この中で不良少年という存在は「硬派」と「軟派」の2つのタイプに分けられている。「帝都を横行する不良學生の中には、腕力を武器として喧嘩口論を得意とする硬派と稱すべきものと、婦女子に關係をつけて金銭を捲上ることを唯一の手段とする所謂軟派なるものの二つがある」（鎮唯剣客 1915）この記述からも分かる通り、大正期では「男性が性的意図を持って見知らぬ女性にアプローチする」ことがナンパではなく、そのプレイヤーを「軟派」と呼んだ。つまり「軟派」は今で言うところのナンパ師であり、「ナンパ」の語源は意味的には「ナンパ師」なのである。

雑誌の性格を概括すると、1915年ごろ～1970年代中ごろまでは、主にナンパという行為そのものやナンパをする者たちとそれに応じる者たちのルポタージュであり、教育者や雑誌記者などプレイヤーでない者からの「外の視座」で語られることが多い。1970年代までにナンパはすでに存在していたものの、その資料数の少なさから、人口に膾炙していたものとは言いがたく、物珍しさからこのような性格の記事になることが想像できる。

1978年ごろを境に1980年代以降は、ルポ的なものからナンパの体験記やテクニック、マニュアルと言った記事に比重が移っていく。特に1980年代前半は『週刊プレイボーイ』『平凡パンチ』『GORO』などの青年向け週刊誌が毎週のようにナンパ特集の記事を載せるようになり、ナンパに関する記事が一気に増える。つまり週刊誌におけるナンパの扱いは1980年ごろを境にして、外的-観察的なものから、内的-行為的なものにシフトしていく。つまりこの頃から、ナンパは観察対象でしかない逸脱や奇妙なサブカルチャーから、多くの人実践するポップカルチャーとしてその意味を変遷させていった。

いずれにせよ、日本におけるナンパを歴史的に記述しようとするれば、先行研究がない以上、時代の風俗を写し出す雑誌からその情報を得て分析していくのは不適切ではないだろう。本研究では、公益財団法人大宅壮一文庫所蔵の約76万冊（2015年11月）の雑誌の中から「ナンパ」「なんぱ」「軟派」「ガールハント」をキーワードとして検索をかけ（結果4725件 最終検索2016年1月）、中でも「主に男性が見知らぬ女性に性的な意図をアプローチすること」を主題とした記事498件を資料として扱う。この方法でヒットした記事を年代別に分けると、1910年代が1件、1930年代が0件、1940年代～1950年代は0件、1960年代が8件、1970年代が29件、1980年代が131件、1990年代が182件、2000年代が105件、2010年代が42件と、年代によって資料数が大きく違う。極端に資料の少ない1960年代までのナンパについては、全体像を描くことが難しく、あくまでも現代に連なるナンパの系譜イメージを捉えるものとして記述する。本格的に資料が増える1970年代以降は資料数の増加にともなう程度適切な当時の社会におけるナンパの扱われ方が見えてくると思われる。また、雑誌記事という特性上、その内容は事実の正確な記述というより、読者を楽しませようと内容を戯画化しているもの

が多いと考えられる。ゆえに記事中の評論部分や読者に読ませようとするためのレトリック、誇張などに極力注意し、そのような部分については排除する。事実が記載されていると思われる部分を「ピックアップ」し、あくまでも当時の社会的な事実としてのナンパについて概観し、ナンパの歴史的変遷として記述していく。

## ■2-2 1910年代-大正期のナンパ～都市をうろつく不良少年たち～

先述のように、ナンパという言葉は、今で言うところのナンパ師の意味を持つ「軟派」が語源であったが、では当時、その「軟派」と呼ばれた人びとはどのような青年たちでありどのようなナンパをしていたのだろうか？

先の『武俠世界』の記事によると1915年当時の軟派は、流行に敏感でファッションに気を使い、過激と言われていたヨーロッパの恋愛小説や自然主義に影響を受け、欧米スタイルの自由恋愛を彼ら流に実践していたと言う。

「ドウスル連」「フレンド」という例外的な一部の軟派グループを除き、一般的な軟派は硬派のように団体で行動することは少ない。「眞の實行派になると全然単独行動を執つて居」た。その風貌は「衣物の如きも軟か物を踵の隠れる程に着流し、帯も色物の縮緬を用ゐざれば白縮緬の兵児帯を締めると云うふうやうに常にチャラゝし」しており、女性の目を惹き付けるためのコーディネートに心掛けていたようである。ハーモニカやヴァイオリンと言った趣味も女性を惹き付けるための小道具であり、ファッションからナンパの小道具まで工夫を凝らすところは現代のナンパ師と変わらない<sup>xiii</sup>。

軟派は、浅草の映画館や、縁日、祭り、公園などの盛り場で女性にアプローチした。路上ナンパの方法としては、当時の女性言葉などを敢えて使用しラブレターや名刺をしたため、歩いている女性の着物の袂に滑りこませたり、道や公園で見かけた女性を尾行し声をかけていたようだ。アプローチの方法も今のナンパの手法と極めて似ており、現代のナンパ師が渋谷のセンター街で〈声かけ〉をして女性と連絡先を交換する〈番ゲ〉するナンパの手順と本質的には変わらないと言える。また、映画館などでは女性の隣の席に座り、手に触れてみた後、相手が拒絶しなければ手を握るというナンパの手法として開発していたようだ。他にも、わざとつまづいて女性にぶつかり「ご免なさい」などと言って話しのきっかけをつくったり、道などを尋ねて話しのきっかけを作る手法もあったとのことである。（鎮唯：1915）このあたりも現在でいうところの〈間接法ナンパ〉と全く変わらない。

軟派はナンパの経験が浅い段階では、女性たちと性的関係を結ぶだけに止まるが、金銭に困りだすと彼女たちから小遣いをもらったり、関係した女性を風俗店などに売り飛ばしたり、働かせたりするようになる場合もあったようだ。つまり現代で言うところの「ヒモ」が軟派から派生していたようだ。

また、軟派は当時の「大人」からまなざされた不良学生のひとつであるから、多くは学生の身分だった。当時の学生はエリート階級の子であることがほとんどで（桜井：1997）、すなわち軟派も上流～中流の家庭の子であった。軟派は日露戦争集結の1905年以降観察されるようになり、「明治40年（1907年）以後はだんだん殖える一方である」であった（鎮唯1915）。

また、同雑誌における長髪逸士の記事によると、東京や大阪、神戸、仙台、名古屋、福岡などの各地方大都市から、浜松、岡崎、甲府、富山の中規模都市、当時の植民地であった台湾などに、その姿を確認することができたという。

この時期の多くのジャーナリズム報告では硬派と軟派を違う青年像として描きだしている（鎮唯：1915、轅川：1913）。

一方で、神戸を本拠地とする白手組（ホワイトハンド）という230人を超す大所帯の不良少年グループなど、硬派と軟派を併せ持つハイブリッドな組織もあったようだ。A組という美少年のみで組織された対婦女子ナンパ専門の部隊。A組を監督しつつ、脅迫や喧嘩を得意とする硬派のK組。さらにK組の中でもエリートから選ばれ、組織全体を監督し、外交、会計、秘書を司る幹部としてM組の三部に分かれていた（長髪:1915）。

#### ▲硬派

本論文で注目するのはナンパをしていた「軟派」であるが、その同類であり、対照的な存在として扱われる硬派とはいかなる存在だったのだろうか。彼らは、例えば『骸骨団』『タイガー倶楽部』などというチーム名を名乗って徒党を組み、チーム間で喧嘩や抗争を繰り返す武闘派であり、基本的には軟派のように女性とは交際せず、美少年を愛でていた。ある種当時は異性愛が軟派で、同性愛が硬派だったと言えよう。明治33年には東京水道橋で、ひとりの美少年をめぐる3つの不良少年チームが集まり動員200人の大乱闘事件が発生した。

彼らはグループを成して喧嘩に明け暮れていた。明治維新当時の志士のような振る舞いを真似た自由民権運動の壮士をさらに真似て、町中で徒党を組み、喧嘩や口論し、短刀、ピストル、ナイフ、ステッキ、十手などの危険物を懐中し、縁日や公園で他の硬派グループと喧嘩や決闘する。彼らはバンカラなどとも呼ばれ、その風貌は「破帽弊衣を得意がり、をかま防止に朴齒の下駄をガタつかせて大道狭しと濶歩する」と形容される。明治32年＝西暦1899年頃に東京・神田を中心として勢力を張った「東櫻倶楽部」300人以上、「芙蓉義團」200人以上、「血青團」150人程度、を筆頭とし、数えられるだけでも十数の硬派不良少年グループがあった。（鎮唯：1915）

#### ▲明治-大正期のナンパ師とはいかなる存在か？

硬派と軟派は主に当時の不良学生を中心とした若者のタイプであって、構成員は上～中流家庭の出自の若者が多かった（桜井：1997）。金に不自由していないからこそモラトリアムの遊びとして喧嘩やナンパに勤しむことができた。このように当時の雑誌記事を見ていくと、おおよそ当時のナンパ師＝軟派は次のようにまとめることができる。

風貌：当世風に見て、女らしい。チャラチャラしている。

活動地域：東京を中心として大阪、神戸、仙台、名古屋、福岡などの都市部

活動場所：活動写真館、縁日、祭り、公園などの盛り場

属性：上流～中流家庭の子女

硬派グループは1900年ごろにすでに東京の盛り場には存在し、少なくとも軟派も1907年ごろには確認されていた。そして、100年前の軟派たちの「ナンパ」は現代のそれと大きく変わらず、派手な服装で盛り場を練り歩き、「容色よき令嬢」に〈声かけ〉をして籠絡する……（鎮唯：1915）おおよそ、まだナンパという行為はメジャーなものではないし、そもそも〈声かけ〉のことをナンパとは呼んでいなかった。また、ナンパのプレイヤーたちも都市部に住む学生であり、時間的にも金銭的にも比較的裕福なものであった。ナンパをするためには、時間や金銭のリソースが重要なことは1章で検討したが、100年前のプレイヤーたちはこの条件を満たすことのできるわずかな存在であっただろう。

#### ■ 2-3 1960年代のナンパ～おぼっちゃんたちの反抗～

かつて「ナンパ」は「軟派」という不良青年のキャラクターを表す言葉であったが、これがいつカタカナの「ナンパ」になったのだろうか？つまり、人の属性を指し示すものから「主に男性が見知らぬ女性に性的な意図をアプローチすること」という行為の意味として使われるようになったのだろうか。

管見の限りではナンパという言葉が日本の雑誌メディアに現れ始めたのは戦後20年後程度のことで、1965年の『週刊サンケイ』の記事に見られる。1930年代や1950年代にも雑誌上で「軟派」という言葉は使われているが、まだ「ナンパ」は見られなかった。また、記述されている内容についても「男性の見知らぬ女性へのアプローチ」という意味ではなく、新聞や文学での意味で使用されていた。後の1980年代にナンパの特集雑誌を多数組むことになる『週刊プレイボーイ』（集英社）の創刊が1966年であるが、この雑誌でもまだ「ナンパ」という用語は使っていない。しかし、1967年には「日本青年の海外ハント武勇伝」というタイトルで、ナンパ的な特集を組んでいる。ただ日本のナンパシーンを記述したものではない。とは言いつつも、60年代のプレイボーイ誌ではすでに後の消費文化の流れに乗るナンパの先駆けのような、「軟派な」記事が多数組まれている<sup>xiv</sup>

数少ない、1960年代のナンパ記事であるが、どのようなものだったのだろうか？先に紹介した、1965年3月22日発行の『週刊サンケイ』が「マッハ族」「フーテン部隊」と呼ばれる若者たちを紹介しており、彼らはナンパを目的として銀座に集ってきていると報告している。本記事によると、彼らマッハ族、フーテン部隊の少年たちは銀座にやってくる何をするでもなくたむろしている。スポーツカーに乗って銀座を走りまくる「マッハ族」。彼らは10代後半～20代後半までの男性で、また女性を同伴してやってくるものたちもいる。ポルシェなどの高級車に乗っている者も確認されたようだ。もう一つのグループは「フーテン族」。こちらはマッハ族よりも比較的若く、中学生～高校生で構成される。まだ自動車免許が取得できない年齢の若者たちがコンチネンタルルックやアイビールックで身を包み、銀座の路上で仲間と談話したりナンパをしたりするというのだ。両者とも比較的裕福な家庭の子女であったようで、フーテン族の少年少女は月5000円～10000円の小遣いを貰っていると証言している。2015年現在の消費物価指数は1965年のおよそ4.2倍<sup>xv</sup>（統計局：2015）であるから、現在の価値に換算すると約20000円～40000円もの小遣いを貰っていたことになる。現代（2012年7月）の高校生の小遣い平均額は4585円（公益財団法人消費者教育支援センターと公益財団法人生命保険文化センター：2012）であるから、その4.36倍～8.72倍<sup>xvi</sup>に値する小遣いを得ていたということになる。

少し年上世代である「マッハ族」の青年たちは自家用の自動車で乗り付けていたし、ある19歳の少年はバーでのアルバイト代25000円と家からの小遣いが50000円もあったそうである。フーテン族とマッハ族には直接的な結びつきはなかったようだが、フーテン族はいわばマッハ族の予備軍のような存在であり、共に裕福な家庭の子女が「家庭から、学校から、すべての束縛から飛び出」す先として銀座を選び、たむろし、そこでナンパをしていた。

では彼らの行うナンパとは一体どんなものであったのだろうか？あるフーテン族の少年は「ナンパして、サテン（喫茶店）に行ったんだ。きょうは、11時に出てきてよオ、もう三回もサテンに行った」とか「ナンパってのはサ、街で女の子誘ってさサ、サテンへ行って、そいでしゃべったりするんだよな。ただそれだけだよ。そりゃいっしょに旅館に行ったりするのもあるけどサ」などと述べている。同じようにマッハ族の青年も「車だと金も最低の線ですむもんな。旅館代はいらないしよオ。ヘッドライト当てられても反射するから、なかは

見えないしょ」、「車で遠出してさァ、おそくなっちまえばよ、帰ろうなんて女はいないもんな」と証言している。

彼らとたむろ行為を共にする女子たちも積極的にマッハ族の車に「乗せてってよ」などと誘っていた。彼女たちもナンパ少年たちと同じように、裕福な家庭の子女であり、家庭の束縛を逃れて銀座にやってくる。「(家に) 帰りたくないの」「ウチなんかいてもどうしようもないもん」「ここにいて、みんなとさわいでいるほうが気楽だし」などという彼女たちの中には家出をした者たちも多数いた。当時の警察は「(銀座にたむろする少年少女の) 家庭はみな中流以上で、貧困というのはありません。家出の原因は家庭の無理解、無関心、愛情の欠如ですかね。家庭をきらってる」と証言する。あるフーテン族の少年も「オレたち、なんでこんなところにいるかわかる？家庭に問題があるからですよ。親が理解がないからですよ。好奇心でのもあるけどね」と言っている。

また、1968年6月発行の『文藝春秋漫画読本』では深夜の原宿にスポーツカーで集まる「原宿族」へのインタビューが掲載されている。彼らも銀座の「マッハ族」と同じように、「親の買ってくれたスポーツ・カー」を乗り廻して、「カッコいい女の子を探し、ナンパして江ノ島あたりにドライブに行くのだと言う。彼らはインタビューアの風俗小説家・梶山季之がセックスをしているのかどうかを聞くと、お茶を濁すようにして「彼女から断られたら悪いもんな!」と積極性を否定している。このような消極的な少年たちを梶山はナンパなどは断られてもともとで、最近の若者は覇気がないと誌上で説教しているのだが、いずれにせよこの時代には東京の夜の繁華街などに自動車で乗り付け、ナンパしている者たちがいたようだ。

これらのルポタージュに現れるナンパのプレイヤーは、いずれも中流以上の裕福な家庭の子女であって、家庭や学校からの逃避、モラトリアム的な行動として銀座や原宿に集まり、ナンパをしていたようだ。彼らは大正期の軟派と同じく、時間的・金銭的に余裕があり(ナンパの条件)、家庭や学校への反抗として(ナンパの動機)ナンパをしていたことが伺える。1960年代の日本において「学校」や「家庭」はその支配下にあった少年たちにとって敵意の対象となっており(桜井:1997)、少年少女は家や学校を抜け出して、都市の繁華街などにたむろすることが社会問題になっていた。1960年代後半は1947年～1949年生まれのベビーブーム世代が10代後半～20代前半を迎え「若者」が台頭してきた時代でもあった。このような社会状況の中で、「坊ちゃん嬢ちゃん」たちの「反抗」としてのナンパが行われていたのである。銀座にスポーツカーで乗り付け、アイビールックに身を包んでミニスカートの女の子をナンパする……大正期までではないが、まだ経済的、時間的に余裕のある都市中間層の子女がナンパの主役であった。しかし、このころから急激に高学歴化し1965年には高校進学率が70%を超え、時間的に余裕の若者が急増したと言える。そのため、例えばナンパのプレイヤーに多くの若者が参入し、必ずしもお金持ちの子女ではなくても銀座などの盛り場に遊びに来られるようになったのである<sup>xvii</sup>。ここにナンパがすでに反社会的なものから消費社会的なものに移行しつつあるということが見られる。つまり、大正期のようにごくわずかのエリート層の不良学生文化であったナンパが徐々にその下の層にも落ちてくるのがこの時期なのである。

風貌：アイビールック、コンチネンタルルック、英国紳士風など。

活動地域：東京の繁華街を中心としていた。銀座、原宿、横浜など。

活動場所：ストリート、盛り場、公園、江ノ島などのリゾート地に

属性：上流～中流家庭の子女（都市中産階級）当時、高級スポーツカーを自家用車で持てるぐらいの上層レベル～それに憧れる庶民層まで。団塊の世代。

#### ■ 2-4 1970年代のナンパ～ナンパの大衆化～

1968年から1969年にかけて全国の大学では安保闘争が盛んになっていった。また、1970年のよど号ハイジャック事件、1972年のあさま山荘事件など、この時代が熱い「政治の季節」であったことはその記憶がない者たちにとっても常識である。そして日本社会が高度に消費化し、社会が豊かになっていくことと反比例して政治の季節は終わって行く。ではナンパは政治の側についたのか、消費の側についたのか？言うまでもなく、後者である。60年代に銀座に集った若者たちはすでに「消費する若者」であった（宮台・石原・大塚：2007）。そしてここに集う消費する若者たちの中から当時のナンパのプレイヤーも生まれていたことは前項で指摘した通りである。1970年に大学進学率は23.6%、75年には37.8%まで上昇し、それまでのような大学生＝エリートではなく、大衆としての大学生をベースとした学生文化が70年代を通じて浮上してくることになる（難波：2007）。60年代までのようなある種の不良文化エリートたちがやっていたナンパも、徐々に大衆としての大学生たちの手に渡って行くのである。

1969年1月9日発行の『週刊大衆』は、大学構内でヘルメットにゲバ棒を持つ全学連の学生の横では、多くの学生たちが性に没頭していると記述する。年末になれば学校には登校せずアルバイトに勤しみ日々ナンパする学生や、名刺を使って他大学の女子大生やデパートの店員をナンパするもの、同級生たちと男女のグループでスキーに出かけるものなどが紹介されている。また1974年には湘南ビーチのナンパを特集する記事が出現している<sup>xviii</sup>。

また、この頃になるとナンパが行われる場所が60年代までの銀座から新宿や渋谷などがメインになっていく。難波功士は吉見俊哉の、1920年代前後の「浅草⇄銀座」と1970年前後の「新宿⇄渋谷」という盛り場の移行説にさらに付け加えて、1960年代なかごろに「銀座⇄新宿」への転換があったのではないかとする（難波：2007）が、ナンパのメインストリートに関してはこの説に少し遅れて追随する。1973年11月26日発行の『平凡パンチ』ではナンパ・ルポの場所として渋谷と新宿が取材されている。またこの記事で興味深いのが、ナンパのプレイヤーたちがそれまでの「おぼっちゃん」たちに限らないことである。詐欺師のような男性、30代の労働者風の男性、40代を優に越した紳士風の男性、渋谷では高校生の二人の男子学生などである。彼らは同じ盛り場に集まっていることで共通しているが、それまでの「軟派」や「〇〇族」のような仲間内の関係性がない匿名の通行人である。60年代まではナンパはある種の閉じられた「族」＝コミュニティ内の文化であったが、この時期にはそのような性質はかなりなくなっている。盛り場であれば、誰でも参入できるようになったのである。

#### ■ 2-5 ターニングポイントとしての1978年

結論を先取りすると、1978年は日本のナンパ史において重大な転換点である。1960年代から1970年代にかけて徐々にカウンターカルチャーや不良文化と言った意味が退行し、代わりに消費文化や大衆文化としての色合いが濃くなって来るのだが、1978年を境にこの傾向が完成する。1978年がナンパ史の中で重大な年となるのは3つの要素がある。①学園祭ナンパの隆盛②ナンパマニュアルの出現③ストリートではない、ディスコナンパの登場である。



### ▲学園祭ナンパの隆盛

まず、学園祭ナンパの隆盛であるが、1977年にインカレサークルである「大学企画事業連盟」が日本で初めて大学ミス・ミスコンテスト開催した。この時、当団体は都内の歩行者天国でナンパによって候補者を探し出した。時年の1978年もミスコン出場者を集めるために、ナンパをすることになる。この年は週刊プレイボーイとの共同企画で、地下鉄でのナンパによる候補者探しが行われた。ミスコンの候補者探しと言ってもほとんどは口実で、記事の内容はナンパのルポであったり、声をかけられた候補の女子学生たちのスリーサイズやタイプの女性、ナンパについていくかどうかの回答が載せられている。ここで注目すべきなのは、記事の構成に現れる「大学生」と「ナンパ」に関する強い結びつきである。参加している大学生は都内有名私立6大学であるが、あたかもこのような大学生がナンパを体現するような記事になっている。実際この象徴的な記事以外にも、以降毎年のように『プレイボーイ』『平凡パンチ』『GORO』などの大学生向けの雑誌で、学園祭＝ナンパのような特集が組まれている。1970年代以降、キャンパス内の恋愛やセックスなどの特集は組まれているが、大々的に学園祭＝ナンパのイメージができあがるのは1978年のことなのである。また、このころを境に雑誌におけるナンパのプレイヤーの主役は完全に大学生になってくる。

### ▲ナンパマニュアルの出現

また、1978年ごろからナンパマニュアルが突如として出てくるようになる。それまでの雑誌におけるナンパの特集は、ナンパを奇妙なサブカルチャー、または逸脱行為として規定するルポ的なものが多かったが、このころからナンパは実際にやってみるものとして雑誌上に登場するようになるのである。もちろん『プレイボーイ』や『平凡パンチ』のような比較的若い年齢層が読む雑誌にその傾向が強いし、読者の年齢層が高めの雑誌では依然としてルポ的な性格のものもある。しかし、このころになると、ナンパはやってはいけない逸脱行為や反抗行為と言った性格はもはやなく、大学生ならだれでもやってみるものといったような性格のものになっている。そして、そのことを証明するのが1978年以降のナンパマニュアルの急増である。

### ▲ディスコナンパの一般化

1978年は日本で「サターデーナイトフィーバー」が公開され、全国的にディスコブームが起これ（第二次ディスコブーム）、新宿、六本木、赤坂などの有名ディスコクラブが大いに盛り上がっていた。1970年代初頭からごごーごークラブ、サパークラブ、ディスコでのナンパはあったようだが、75年以降78年の大ブームを頂点にディスコが一般化した。それまでのナンパは主にストリートであったが、ディスコブームに相まってディスコでのナンパも一般的になる。大正期に映画館でこっそり行われていたナンパを除くと、野外でない場所でナンパが一般的になったのはこのディスコナンパが登場してからのことではないか<sup>xix</sup>。

これら3つの特徴が1978年を境に、1980年代から1994年ごろまで隆盛を極める。

## ■2-6 1980年代からバブル期まで～ナンパ全盛期～

1978年以降ナンパ文化は大衆化、消費化を極めナンパを取り扱う雑誌記事も一気に増える。70年代と比べてその数は4倍以上となり、青年向けの週刊誌では毎週のようにナンパ

マニュアルやナンパ体験ルポが掲載されるようになる。1980年代のナンパにおいて特筆すべきなのは、それまでの路上ナンパ、ディスコナンパ、学園祭ナンパに加えて、リゾート地ナンパである。夏は、軽井沢、清里、新島、湘南などのビーチリゾートでナンパをし、冬はスキー場でナンパをするのが流行っていた。雑誌上では「軽井沢ならここでナンパ、新島ならここ」のように丁寧にナンパスポットを紹介するナンパガイドマップや、声のかけかた、服装のアドバイスまでするようなナンパマニュアルがその大半を占めるようになった。

#### ▲女性からの関心

1980年代に入ると、それまで実際にナンパをする層、大学生や高校生向けの記事のみならず、女性誌でもナンパ特集が組まれるようになる。例えば『ヤングレディ』1984年7月10号では「ステキな男の子にナンパされてみたい！-真面目な女の子ほど、誘惑に弱いんです！」というタイトルで、ナンパをされたい読者を募って六本木や原宿の路上やバーでナンパ待ちをする企画を組んでいる。同じく84年7月28日発行の『微笑』でも「84年夏、女からのナンパ術」という記事が掲載されている。内容は女性から声をかけると言うよりも、どうしたら「イイオトコ」に口説かれるかのマニュアルとなっている。

#### ▲高年齢層にもナンパが広がる

80年代も後半に入ってくると、大学生より年上のビジネスマン層にもナンパが広がって行く。例えば1986年10月11日の『週刊現代』では「優秀なビジネスマンなら誰でもナンパ名人になれる」との記事で30代のサラリーマンにナンパテクニックを授ける特集を組んでいる。この時期以降現在まで、30代以降を対象とした雑誌でナンパの特集が組まれるようになる。ナンパの関心が大学生を筆頭とした20代前半から30代、40代以降にも門戸が開かれたのがこの時期である。

#### ▲有名ナンパ師たちの台頭

80年代のナンパの雑誌記事には、ナンパに通暁、読者にレクチャーする役として当時の有名ナンパ師たちが頻りに登場する。中でも誌上に多く登場するのはナンパビジネスを始めたとされる佐藤晃と路上ナンパ写真家の佐々木教である。ナンパがどんどん一般化していく中で、このように有名ナンパ師が登場したり、ナンパビジネスが出現したのである。佐藤のようなナンパレクチャー系のナンパビジネスの他にも、ナンパ代行業も出現した。

#### ▲メディアナンパの登場

1985年、電話を通じて見知らぬ相手と出会うことのできるサービスである、「テレフォンクラブ」が誕生した。テレクラは当初「テレフォンセックス」を目的にする店もあったが、わずかな期間で「出会い」の場所として認知されるようになる。また、1986年にはNTTが「伝言ダイヤルサービス」を開始する。伝言ダイヤルは、伝言ボックスにメッセージを吹き込んだり、録音されたものを再生するサービスだった。このサービスは、知り合い同士の待ち合わせや、仕事用といった使用シーンが想定されており、実際にそのようにも使われたが、新しい出会い系メディア、アダルトコンテンツとしても利用されていった。1989年になると、NTTがダイヤルQ2サービスを開始する。ダイヤルQは、頭に「0990」を付けた番号を用いる電話による有料情報サービスの情報料金を電話料金と一緒に回収するもので、電話ネットワーク上に声のビジネス空間を作り出すものだった。このQ2回線を利用してユーザー同士が直接電話をすることのできる「ツーショットダイヤル」も人気を博した。このサービスができたことで、テレクラ利用のように店舗に出向かなくても、自宅にいながら見知らぬ

相手と出会えるようになったのである。

このようにして、80年代のナンパシーンはバブル景気と共に更なる消費化と大衆化をすすめ、路上や盛り場と言った地理上の場所以外の電脳空間にそのナンパのステージを発見したのである。

## ■ 2-7 バブル以後の1990年代～メディアナンパとデフレナンパ～

1986年から続いたバブル経済は1991年から1993年にかけて崩壊した。ナンパもバブル景気の異様なムードと相まって、80年代の後半にかけてそれまでにないくらいの消費化の趣を見せた。当時ナンパをするにはお金が必要だったのだ。例えば、六本木のディスコ『GIZA』で女の子に声をかけ、後日のデートではパスタが1皿2500円する『キャンティ』で食事し、西麻布のバー『レッドシューズ』に移動して、最後は『赤坂プリンスホテル』に泊まるというコースがナンパ師たちの間での決めりだったくらいだ。デートには自動車で向かわなければならず、BMWやベンツを筆頭として高級外国車が推奨されることはもちろん、シビック3ドアやマーチクラスでは女性に相手にされない風潮もあったようだ。

ナンパのこうした高度な消費化は実はバブル経済が終焉したあとも続く。最後のディスコブームを牽引した『ジュリアナ東京』がオープンしたのが1991年5月で、このころはすでにバブルが弾けていたと言われていた。ジュリアナ東京はバブル的なナンパの終焉期に現れわずかな期間であるが、絶大な人気を博した。80年代後半に六本木の人気ディスコ『TUREA』で照明崩落事故がおき、そのあおりもあって閉店することになる。これを皮切りに次々に東京の街からディスコが消えて行く。そしてまだバブルが忘れたくない人びとが最後のお祭り騒ぎにと集った場所が『ジュリアナ』だったのだ。その『ジュリアナ』もバブル崩壊まっただなかの92年の正月に最盛を迎えるが、1994年8月31日に閉店となった。

バブルが崩壊し、『ジュリアナ』が閉店した94年頃になるとやっとなんパの質が変わってくる。それまでの消費路線は徐々に退潮し、ナンパが個人的な趣味に変容していくのである。90年代に雑誌上でのナンパを扱う記事は131件⇨182件と増えているものの、割合に関しては70年代から80年代に関しては4.5倍増だったのが、1.3倍増に止まっている。内容は、バブル崩壊以降の95年ごろまでは、80年代の焼き直しの記事も多く見られる他、特筆すべきは85年頃に始まったテレクラ、ツーショットダイヤルなどのメディアナンパが人気を博していたということだ。また94年ごろには2000年代以降隆盛するインターネットを使ったナンパの前身とも言えるパソコン通信ナンパが出現する。

これらのメディア使用料は決して安くなかったが(荻上:2011)、それでもわざわざ高いお金を使って東京の盛り場でナンパをするよりも、自宅や地元でするナンパはずっと手軽だったようである。

バブル時代までにナンパ文化の中で支配的だったのは消費的な価値で、東京都心の街でナンパすることは当たり前だった。ナンパの中心地は60年代は銀座や新宿で、70年代は新宿、渋谷、80年代は六本木や赤坂などの東京の都心だった。60年代の銀座でさえ、千葉や東京郊外からわざわざナンパをしにくる少年もいたし、80年代後半の六本木のディスコには地方から遊びにくる人たちもかなり多かった。バブルまでは遊びやナンパの中心は東京だったのである。

この状況が90年代前半から変容する。ひとつは先に述べた、そもそも地理上の場所を必要としない電脳空間でのナンパ＝メディアナンパである。もうひとつのトレンドとして郊外

でのナンパが始まったのである。千葉の幕張や、埼玉の大宮などに「ナンパ橋」や「ナンパ通り」と呼ばれる場所があり、ナンパをしたい男性やナンパされたい女性が自動車で集まってきていた。週末の深夜には何百台もの自動車が列をなし、交通違反を防ぐため警察も出動するほど人気を博してしたが、バブル期に必要なと言われる外国車での乗り付けるものは少なく、もっぱら身の丈に合った国産車でナンパをしていた。ナンパされにきた女性の中には「一番ラッキーだったのはデニースをおごってもらったことかな」<sup>xx</sup>とバブル期のナンパではあまり考えられない、デフレ化した発言をしている。

1990年代後半になると、バブルのころの「東京都心至上主義」は消え、都市部が中心とはいえ、全国各地でそれぞれ好きなようにナンパをする文化がメジャーになってきたと言える。東京でも新宿や渋谷などの都市繁華街に限らず、八王子や中野などで「安くナンパする」という証言もかなり出てきた。<sup>xxi</sup>このころになると、もっぱら、雑誌上のナンパ特集もバブル期の頃のように派手なものはなくなり、出始めのネットを使ったメディアナンパ特集や、これまでになかったような「安くナンパする」というコンセプトが台頭するようになった。バブル崩壊以降のナンパは80年代のように「大学生なら誰でもやる当たり前の文化」というような様相はなくなり、あくまでの興味をもった人間が個人的にやるものと変容したのだ。

## ■ 2-8 2000年代から現在にかけてのナンパ～暗いナンパと空間の変容～

1990年代には既にナンパは大衆的なものではなくなり、興味のある者の「島宇宙」(宮台・石原・大塚：2007)的な文化になっていた。まず、2000年代以降のナンパで特徴的なのは99年に端を発する携帯電話を使った出会いの出現により、出会いにますます場所が必要でなくなっていくことだ。85年のテレクラ、89年のツーショットダイヤルの出現で新しい出会い＝ナンパをするのに必ずしも街に出る必要がなくなる。さらに、94年ごろからパソコン通信、97年ごろからインターネットを使ったナンパが出現する<sup>xxii</sup>。そして99年にNTTドコモが「iモード」サービスを開始することによって、携帯電話からネットにつながるようになる。このことによって出会い系サイトに携帯電話でもアクセスできるようになり、ケータイ版出会い系サイトが隆盛を極めるようになる(荻上：2011)。その後、2008年ごろより、スマートフォンが普及しだす。旧来型の掲示板型の出会い系サイトがスマートフォン普及以降も存在するが、スマートフォンのGPS機能を使い出会うことのできる「Tinder」「ぎやるる」などのマッチングアプリや、「LINE」アプリのIDを掲示板に書き込み、出会えるようになったのは2012年ごろである。また、2003年からのブログブーム、2005年ごろよりソーシャルメディアが普及しだし、ネットでのコミュニケーションがそれまでのような「アングラ」な雰囲気はほぼ無くなり、大衆化する(武田：2011)。SNSではつながっている個人の文脈は共有されやすく、以前のメディアナンパよりマッチングが容易になった<sup>xxiii</sup>。IT技術の進化により出会いはより非場所的に、簡単になったのである。

ではナンパのプレイヤーたちはどうなっているのだろうか？80年代～バブル期にかけては主に大学生や「クリスタル族」(難波：2007)がメインのプレイヤーであり、多くの人が参入していた。バブル崩壊の90年代中期以降はナンパ文化の人気がなくなることもあいまって言わば「好きな人が好きなように」勝手にやるものとなった。そして、2000年代以降特筆すべきなのは、ナンパ師たちの「自己啓発化」である。

2003年のブログブームの頃から、ナンパの経験やノウハウ、その日の「戦果」を記述する、いわゆるナンパブログも出現するようになる。このナンパブログの中には、ブログの書き手が、ナンパを始めた動機やナンパの実際を、リアリティをもって詳細に記述することでカリスマ的人気を博すようになったものも少なくない<sup>xxiv</sup>。ネットで有名になったナンパ師

は 2006 年ごろからカリスマナンパ師として雑誌やネットで取り上げられるようになる。このカリスマナンパ師たちはブログや書籍で自らの「心の闇」を明かし、ナンパする相手も例えば家出少女や何かしら不幸を抱えているような少女を狙うことが特徴的である<sup>xxv</sup>。この頃になると 90 年代前半までのような明るい雰囲気はナンパ界にはなく、暗い雰囲気が漂い始めた。カリスマナンパ師に憧れて、ネットを通じて教を請う者も増え始め、1980 年代と似たようなナンパレクチャービジネスも再興する。カリスマナンパ師も教わる者も、たとえば「非モテコンプレックス」の克服のためにナンパに乗り出す、この状況はナンパ師の「自己啓発化」として捉えられると論者は考えている。2016 年現在においては、ナンパブログや SNS を利用したナンパ師同士のコミュニティも盛況であり、2003 年頃から基本的にはその様相は変わっていないと言える。

### 第 3 章 考察：ナンパを成立させる社会的条件

第 2 章では大正期から現在までの日本のナンパの歴史を、主に雑誌から情報を得て概括した。このナンパの歴史において変遷してきたものは、ナンパが行われる場所とその意味だった。本章においては、2 章で明らかになったことをさらに明確にするために分析を行う。また、場所と意味のセットではない、他の社会的条件についても考察する。

#### ■ 3-1 ナンパが行われる場所と意味

大正期に現れたナンパは、主に東京や大阪の大都市をその舞台にしていた。中でも東京の浅草や水道橋という盛り場の縁日、映画館、公園などで行われていた。その頃の浅草を盛り場にしていただしたのは下町一帯の下層民だったのではないかという説がある（吉見：2008）。資料に残るこの頃のナンパのプレイヤーは下層民ではなく、むしろ上層民であった。もしかしたら、下層民たちもナンパをしていたかもしれない。それにしても、なぜ上層民であったナンパのプレイヤーたちは浅草などの盛り場を選んだのだろうか？下層民が浅草を盛り上げたとしても、当時の浅草に娯楽を求めてやってきていたのは下層民だけではなく、ブルジョワやインテリを含む多様な階層がそこには包摂されていたのである。そして、このようなあらゆる種類の階層を受け入れてしまうところに、浅草が盛り場として輝いた理由があった（吉見：2008）。また、当時のナンパは上層家庭の不良少年たちの反逆行為であった。下層民がつくる猥雑な街を上流の子女たちがあえて出歩くことに、彼らの秘められた反逆性を読み取ることができる。ゆえに、彼らを教育する立場であるジャーナリズム的言説が彼らを「軟派」の「不良」としてカテゴライズしたのではないか。彼らの生活圏にはない「街の輝き」が浅草にはある。それは活動写真館であり、見せ物小屋であり、「浅草十二階」であったかもしれない。

吉見は浅草の盛り場としての魅力として、「変幻自在さ」と「共同性の交感」を挙げている（吉見：2008）。「変幻自在さ」とはそこにいる人も、そこでおこる出来事も多様であるということである。そこは「ある人がいつも特定の役割を演じるということがなく、彼らはその演じる役割を自在に変え続け、場合によっては他の場所では考えられないような登場人物を平気で演じてしまう」ような場所だったのだ。

「共同性の交感」とは、浅草の大衆演劇では誰がパフォーマーで誰が客であるかに大した垣根はなく渾然一体としていたが、街にもそのような空気があったのだということである。つまり、当時の浅草ではある意味、誰もが「見られる者」でも「見られる者」でもあった。

誰であろうとも「同じ社会的世界の住人であるという気安さ」があったのである(吉見:2008)。

当時このような性格を持つ場所で、ナンパが行われていることには非常に説得力があると考えられる。なぜならば、そもそも「軟派」の不良少年たちは自分の家庭や出自に抗うためにナンパをしていたのだが、この場所ではいつもと違う自分になれるし(変幻自在さ)、いつもと違う人間たちと触れ合う(共同性の交感)ことができる。そして、ナンパをすることは女性との「共同性の交感」の具体的表れとして、彼らの反抗であり、カタストロフィーだったのではないか?

前述したように、吉見は1920年代に東京の盛り場は浅草から銀座に移り、1970年代には新宿から渋谷へと移ると主張したが、難波はそれに加えて、60年代中盤に銀座から新宿に移ったと主張している。1960年代の銀座は50年代や戦前の「銀ブラ」の伝統は薄れたにしる、依然として東京最大の盛り場だった(難波:2007)のだが、1960年代はこの銀座で、「おぼっちゃんの不良少年」たちがナンパをしていた。当時の銀座は、「みゆき族」「カラス族」「アイビー族」などさまざまな若者が集う場所であった。資料に現れた「マッハ族」や「フーテン部隊」はその風貌は「みゆき族」や「アイビー族」に似ているものの、「みゆき族」が持っていない(難波:2007)自家用車を持っていたりと厳密にはどういう若者たちだったのかは判別できない。しかし、小遣い額や自家用車の所持からしておおよそ裕福な家庭の子女であるところは先述した。

みゆき族が銀座に来ていた理由として難波は銀座には高級感が漂い、彼らにとって憧れの店がそこあったからだと言う。みゆき族ら若者らが銀座に集ったのはこのような高級性への憧れであり、彼らは既に「消費する若者」(宮台・石原・大塚:2008)であった。では、本論文で現れた「おぼっちゃんの不良少年」は大正期のような「反抗する不良」だったのか?それともただの「消費する若者」だったのだろうか?いや、彼らはその中間的存在ではなかったのだろうか?確かに、服装を考えるとみゆき族的な「消費する若者」であるが、彼らの自意識ではあくまでも反抗であり、そう証言していたのであった。つまり、このころのナンパの担い手たちの一部は歴史的に存在していた「反抗性」を引き継ぎつつも、後に花開く「消費性」も持ち合わせていたことになる。

ではあらためて当時のナンパ師たちにとって銀座という街はどのような場所だったのだろうか?「ここは大人たちの街である」という大人たちの言い分に対する「この通りは俺たちのキャットウォークであり、ナンパのコロシウムである」場所(難波:2007)、ある種、大人たちの高級性に憧れを持ちつつも(消費性)、それに順応するのではなく、我がものとして銀座を手に入れようとしたのだ。つまり、60の銀座とはナンパする若者たちにとって、消費的な場所でありながらなおかつ反抗の現場だったのだ。

次に、1970年代以降1990年にテレクラ、インターネットなどのメディアナンパが出てくるまでのナンパの場所はどのような意味を持っていたのだろうか?1970年代以降ナンパが行われている場所は、新宿、渋谷、六本木の路上、ディスコ、レジャー先のスキー場やビーチ、大学の学園祭であった。論者が調べた限りでは、この時期には銀座や浅草、上野でナンパが盛んであったという記事は無かった<sup>xxvi</sup>。

例えば、1973年のパルコのオープンを皮切りに、パルコ新館、東急ハンズなどの大型店舗の開設が続き、70年代末までには渋谷は「明るく開放的でファッショナブルな街」として若者たちの強い支持を受けるようになる。また、原宿、青山、六本木と言った一群の街街が、互いに作用しあいながらファッショナブルな空間として浮上する(吉見:2008)。

雑誌記事に現れたナンパでは、1970年代までは新宿の路上やディスコなどが多かった。

前述したように 1978 年代以降はさらに消費化と大衆化が進むのであるが、このころより渋谷や六本木などの「明るく開放的でファッショナブルな街」でのナンパが多くなり、バブルの時期になると、六本木や赤坂などより「ファッショナブル」な場所でのナンパがメインとなる。他にもスキー場やビーチなどのリゾート、学園祭と言った場所でのナンパが確認された。つまりこの時期のナンパ場所はおおよそ「消費をする場所」として意味されている。バブルのころでは「より消費する男がモテる」ことはナンパ界では常識だった。

しかし、1980 年代中盤に入り、ナンパの場は大きな転換点を迎えることになる。それは「場」の拡散だ。ナンパをするために必ずしも現場に行かなくてもよくなったのである。85 年のテレクラに端を発し、現代のマッチングアプリに至るまで電脳空間で新たな「出会い」が生まれるようになってから、それまでのナンパの舞台であった「盛り場」が必ずしも必要でなくなったのだ。またころを同じくして、大宮や千葉などの「郊外ナンパ」が確認されるようになった。

ここまで駆け足でナンパの「場」とそれに付随する「意味」の変遷について振り返ってきたが、図にすると以下ようになる。

図 4) ナンパが行われる場と意味の変遷

場の性格	盛り場			マッチングの場
	時代	場所	意味	
時代	1910 年代	1960 年代	1978 年ごろ～ 1993 年ごろ	1990 年代～を中心として
場所	浅草など	銀座など	渋谷、六本木、 リゾート、学園祭	場の拡散（テレナンパ、ネットナンパ、郊外ナンパ、これまでの盛り場）
意味	反抗	反抗と消費	消費	？

本セクションは、ナンパの場と意味について論じてきたが、それでは上記表の一番右下の枠を埋めることができない。しかし、このことは終章で検討したい。

### ■ 3-2 ナンパを成立させるイデオロギーはあるか

論じてきたように、ある時期まで場所と意味のセットがナンパを成立させる要因となっていた。ではそれ以外にもナンパを成立させる条件はあるのだろうか？  
本項では恋愛の思想について考察してみたい。

近年、主にマスメディアやインターネット上の言論で若者の「恋愛離れ」あるいは「恋愛しない若者」なるものが話題にされている。（たとえば2015年10月19日NHKニュース『おはよう日本』での特集など）また、2014年の内閣府の調査では未婚かつ現在恋人のいない20代～30代の男女への調査において、約4割が恋人が欲しくないと回答している旨を明らかにした。（内閣府、平成26年度「結婚・家族形成に関する意識調査」）一方、以前からのように日本社会においては大正期以降「恋愛至上主義」（赤川：2002）イデオロギーが広く浸透し、つい近年までのテレビドラマなどでは恋愛（至上的）要素を含めないと成立しないほどの、「恋愛教」（小谷野：1999）が通念として作用していたと言える。

そもそも恋愛という概念は近代社会になって生じたものであるが（山田：2002）、近年、何が恋愛で何が恋愛でないかの枠組みが揺らいでいる。というのは先述の論者たちを筆頭に様々な研究者が述べているところである。言わば現代の日本はそもそもの構成概念であった「恋愛」がゆらぎ、その意義を問い直される時代と言えよう。ナンパ＝軟派はその概念が出現して以来、いわゆる「恋愛」の近縁に位置づけられるものの、正当的な恋愛行動として語られてこなかった反社会的な恋愛的行動である。山田昌弘によれば「近代的恋愛」には達成されるべき三つの課題があると言う。①本当（とみなされる）恋愛感情を感じる②特定の相手を求める③個々の欲求を充足すること。この三つの要件をクリアして初めて「恋愛」として成立するというのだ。つまりこの「本当の恋愛」要件を満たさない恋愛的行為は「偽者の恋愛」とみなされ、亜流であり、正当的な立場を獲得できない。

では、この、条件づけが厳しく成立することが困難であることが容易に予想される正当な恋愛はどのような制度（的概念）に後ろ盾されていたか。それが「恋愛結婚」であると山田は言う。このイデオロギーが成立し、制度と上手くマッチングすることによって、社会において正当な位置を得ていたと言うのだ。結婚を前提にしない「恋愛」は恋愛ではなく、恋愛はこのようにして結婚に閉じ込められてきた経緯がある。ただ、山田も指摘するように1975年以降の日本の主に都市部において、今までの恋愛が困難になっている。その要因として山田は(1)恋愛と結婚の最分離(2)女性の社会進出による、出会いのチャンスの増加(3)社会が相対的に豊かになり、恋愛相手への欲求が高度化（山田：1996）を挙げている。恋愛を条件づけていた社会的な基礎が変化したということである。

この1975年以降のこの時期はまさに「ナンパ」が不良文化あるいはカウンターカルチャー的なものから質を変え、多くの若者たちがその名を知り実践に乗り出していった時期である。この時期に正当的な恋愛として除外されていたナンパが「恋愛」の存立危機に乗じてある意味で社会進出するのである。特にナンパは「本当の恋愛」の条件②特定の相手を求めることに反する行為である。必ずしも結婚と恋愛を結びつけなくてよくなり、出会いの数も増え、相手への要求レベルが高くなる。

この「恋愛の危機」の要件はナンパにとってはまさに好機だったのである。山田は今後、恋愛は、特定の他者にあくまでもこだわり、オタクやストーカー的な類型としての恋愛として残るか、あるいは「恋愛」そのものが消滅すると予想する。恋愛が消滅するというのは、「近代的恋愛」がさまざまな要素に分解するということである。つまり、セックスをしたい相手、親しさを感じたい相手、ドキメキを感じたい相手、結婚する相手、などかつては結婚の配偶者とその前段階としての恋人の役割に科せられていた欲求が細分化されて別の人々に分散されるのである。ナンパの実態は後者の予想に近い行為である。

では、恋愛が「死んだ」現代、ナンパは相対的に優位な恋愛行為になっているかということではない。統計調査が表すには、ナンパをする男性は少数であり、しかも時代によってその割合が異なってくる。2005年の『若者の「性」白書』調査では、男子大学生のナンパ経



験率は13.9%、女子1.7%であり、2011年の『若者の「性」白書』の調査では大学生の男子のナンパ経験率は9.8%、女子1.2%。現代においてナンパをしている若者は多くて10%程度であり、しかも1974年と比較すると男子は20%ものポイントを下げている。2005年からの6年間でも4.1%下げている。(1974年の調査では、男子経験率29.6%、女子経験率5.9%である。：『青少年の性行動』) 恋愛が困難に曝され出した時期の方が、もっと恋愛が困難になったと思われる近年よりナンパが盛んだったし、さらに昨今に至ってもナンパ経験率は下がっている。

このように日本においては1975年頃を分水嶺として、「近代的恋愛」概念とその観念に構成された恋愛行動が瓦解し、特に近年に至っては、「草食系」やそれに対置されるような「肉食系」など、明確には概念的区別ができないような性的なコミュニケーション状況になっていると言える。

今では何が恋愛で、何がそうでないのかが明らかではない。ナンパもかつては正当な恋愛ではない行動として、反射的にラベリングが容易な時期があった。故に漢字表記の「軟派」という意味含意が多いことばからカタカナ表記の「ナンパ」というより意味を含まないことばへと変質していくのである。恋愛という概念が作られたのは1870年代のことであるが(柳父：1982) 大正期以降、「恋愛至上主義」イデオロギーを経て1960年代には「親密性パラダイム」が基本通念となった(赤川：2002)。山田や赤川が明らかにしているように、恋愛や性愛は常に構成概念であって、しかもその中心概念を変化させながら、規範として人々の性行動を規定する。

ナンパは恋愛のように多くの人とする行為ではない。いや、恋愛も結婚と言う制度と上手くかみ合って成立するものだった。何か他のものと比べて成立する。歴史的に見てそれはなんだったのか？

まず、現れたのは「軟派」だった。軟派という言葉は「不良少年」のひとつであり、さらにその中の「硬派」の対義語であった。つまり、大きな枠組みとしては「優良な少年」なるものと対置して考えられてきた言葉だろう。すなわち当時は逸脱者としてまなざされていた。また、「硬派」との対比では、より柔らかいものとして考えられていただろう。これは今の言語感覚だと、「チャライ」とか「軽い」に似ていると言える。事実今でも、ナンパをしている人についてよく聞かれる批判は「チャライ」や「軽い」と言ったものである<sup>xxvii</sup>。

1960年代にカタカナ化され、より語源の意味は薄まっているものの、「ナンパ」という言葉はその出自からして反社会的なものであり、今もその意味は残っていると言えよう。1960年代まではまだ反社会的な逸脱者としてまなざされており、ナンパをしているものたちも、まだ反抗の意をもっていた。そして1970年代には反抗の意味がほとんどなくなり、1978年頃にはほぼ消え去り、消費的な意味でのナンパ文化が一気に花開くのである。以降、バブル崩壊までは「ナンパ最盛期」と呼べるほどの大衆文化になった。

そしてナンパ文化が花開く頃には奇しくも①本当の恋愛感情を感じ、②特定の相手と③個々の欲求を満たすと言う意味での「近代的恋愛」が不安定になった。この頃のナンパ経験率は現在の3倍程度である。残念ながら、1975年から2004年までの間のナンパ経験率を統計的に調査したものはない<sup>xxviii</sup>。推察することしかできないが、おそらくはナンパが消費的な意味で絶頂であったバブル崩壊前までが日本人のナンパ経験率が最も高かった時期ではないか。その後、ナンパ経験率は2005年、2011年と年々下がっているのは前述の通りである。

これまでの考察をまとめると、ナンパはそもそも反社会的な意味があった。つまり反秩序的であったが、その近代的恋愛的イデオロギーが崩壊するころに確かに盛り上がりを見せるようになる。だが、そのイデオロギーが崩壊したことがナンパを促進したのかどうかは分か

らない。ただ、「本当の恋愛」や「よい少年」のような支配的価値基準に反するものであったナンパという行為は徐々にその意味は無くなっていったのだ。

#### 4章 不明瞭になった現代のナンパの「意味」理解するために～なぜ彼らは今でも路上に立つのか～

今まで見てきたように、ナンパを歴史的に見て行くと、ある時期まではナンパをする場所と意味がセットになっていた。1960年代までは反抗の意味、バブルまでは消費の意味がそれぞれの場所と対になっていた。また、ナンパを成立させる社会的な思想の検討も行ったが、時期的に整合性はあるものの、「近代的恋愛イデオロギー」がナンパを成立させる重要なピースになったかどうかは分からない。

ナンパ史的に現代はもっともその舞台＝「場」が拡散している。これまでは場がその意味を規定してくれていたが、今では場は拡散しているゆえにその意味が不明瞭である。つまりナンパが社会的に意味するところが分からなくなっているのだ。しかし、現代でも多くの男性たちがナンパ行為に励んでいる。「その意味は個人のそれぞれが持ち、社会的に見れば多様化した」というお決まりのポストモダン論的回答では何も答えられていない。

そもそも、論者がナンパとナンパ師に興味を抱いたのは彼らが行う行為に向かう、ある種の強迫的な姿勢を感じたからである。ここにはやはり同時代的な共通性が何かあるのではないか。

本章では、これまで明らかだったが、今では不明になった現代のナンパの意味について再びナンパ師から聞き取った声を元にして<sup>xxix</sup>、仮説を述べてみたい。

##### ■ 4-1 ケース1～自らのポジションに反抗するSの場合～

“「誰々と付き合っちゃいけない」ってのはあるよね。親世代が経験によって身につけてきた知恵なんだろうね。下の階層と付き合うと自分もその階層に落ちて行くような。子どもは不良と付き合ったら道を踏み外すとかは分からないわけよ。子どもは楽しいことをしたいから。だから子どもにとってそういう親の進言は説得力がないのよね。ただの教えだから。子どもには経験が伴っていないわけだから、やってみないと分からないと子どもは思っている。俺が一時期恨んでいたのは、分かりやすく言うと何も経験させてくれなかったということ。”  
(S氏インタビューより)

Sは30代前半、ナンパ歴8年程度で、ナンパして関係してきた女性は数えていないが3ケタには達すると言う。東京で長らく活動してきた他、全国各地域、海外まで遠征してナンパするという。現在は腕前を活かし、ナンパ講師として活動する。医師の父と専業主婦の母を持ち、3人兄弟の長男として都市部で育った。私立の進学高校に通い、東京の一流大学の文系学部で学んだ経験を持つ。このような経歴を持つ自分を、どの階層に位置するかで捉えたがるのがSの特徴だった。「カースト」という強いニュアンスを持つ言葉を多用する

ことから、Sのエリート意識が垣間見える。ただ、彼自身の認識では「ホンモノの上層部と言うわけではないし、下層でもない」。この階層意識とナンパ行為とを結びつけるのがSのストーリーの特徴だった。ある意味屈折しているとも言えるエリート意識が彼の自己認識像を示唆している。筆者との対話において、彼が話題にしたのはおおまかに言って、過去の生育環境や出自、友人関係、異性関係についてであるが、いずれも直接的にはナンパについての話題ではなく、ナンパを始めた頃の時点を中心にしてその動機を間接的に語っている体となっている。

Sは自己の比較的高階層の出自に疑問を持ち、反発としてのナンパ行為をしていたことを明らかにしている。ただその結果、当初感じていたような階層を越境して他者と交わるようなことはなく、結局は自己の階層的なポジションを確認していったような作業であったことも自認する。ナンパという行為を通して、文化・経済的な豊かさ/貧しさを他者と比較し、自己の相対的な立ち位置を探っていたと評価できる。

Sは自身の階級意識から友情関係を結びにくいことを自己分析する。Sは友情関係への強い希望を持ちながらも、度重なる挫折経験から友情関係を結ぶことを諦めていた。異性愛関係においては友情関係において求めるもの(「同志感」)を期待しながらも、半ば諦めたような形で関係を理解していた。それにも関わらず、同志的な交わりを持ってそうな異性との関係を避けるようにして、本心ではあまり関係したいようなタイプではない、違う階層の女性をナンパしていた。

また、恋愛において関わっていた女性も自らの階層より下であったと言う。彼女との関係の親密性が上がっていくにつれて、耐えきれなくなり挫折してしまった。彼において恋愛と是一对一の人間関係の密度を高めて行くことであり、そこに耐えられなくなると逃避するようにナンパに舞い戻ってきたという。彼の中でナンパとは逃避であり、浅い人間関係を繰り返すことであった。

Sの述懐は主に、①自己の出自/階層性への疑問とその反抗 ②親密な関係への強い期待と諦め からなる。①からは自分とは違う階層の人間とコミュニケーションすることを志向させ、②においてはナンパを逃避行動としてやっていることが明らかになった。

Sの場合、他者と比較して自分が優位に持ってしまうものへの疑問と後ろめたさと、高い水準の親密性への諦めといわばその逆作用の働きがナンパ行為へと向かわせた動機となっている。また、Sはナンパを始めたころと現在の変化はないという。希望が挫かれたところから「墮落」としてナンパを始めたが、その「墮落」も自らフェイクであった評価し、逃避であったためナンパする前とナンパをしている今では大きな認識が変わらないが、諦めを確認するという意味はあったようだ。

#### ■ 4-2 ケース2～ナンパが手放せないTの場合～

“あんまりナンパはうまくいかないんですよ。たまにうまくいくからはまっちゃうみたいな。困難だからこそはまるんですよ。あれですよ。たぶん他の人は、仕事でその欲求みたいなものを満たすというか、そうすべきところと、僕はないからそうなっちゃってるみたいな”

“人間不信はどうですか。感じないですか。ナンパを経て、感じないですか？  
女の子信じようと思ってるんですけど、でも暇だから心配なんですよ。ね。  
女の子を信じられないなと思って”

“なんかあれですね、きっともうすぐできなくなるじゃないですか。40前となると。そうしたらどうなっていくんだろうと思って。みんな子供作ったりして、生きがいみたいなものを得ていくけど、、、でも他にやっぱないからでしょう。面白いものとか、自分の技とかとは言わないまでも、なんとなく自分にはできるみたいなものがナンパなんです” (T氏インタビューより)

Tは30代半ば、ナンパ歴5年程度で関係してきた女性は10人程度のかかり「控えめな」ナンパ師である。池袋を主な活動拠点とし、それもかなり限られた場所でしかやらないという。場所に対するこだわりがあり、インタビューでは「ナンパをやめるには池袋から遠くに住まないといけない」とまで言っている。活動実績も控えめで自ら場所の制限をしているのにも関わらず、彼がナンパ師を自認しナンパにある種取り憑かれ「やめられない」と語るように、彼はナンパに対して強い思い入れがある。

大学時代、見た目がパツとしない友人がナンパしているのを見てナンパの世界に興味を持つようになったTはナンパブログを閲覧するようになった。また同時期にSNSを通じて見知らぬ女性と関係できることが分かった。ナンパを始めるようになってからも成果は芳しくないが、続けているとたまに成功が得られる。するとその成功体験が忘れられなくなったと言う。プロセスで苦勞したからこそ、また稀に出会う成功は手放せなくなるような魅力があるとギャンブルに例えてTは言う。それゆえ半ば行為に飽きてきているにも関わらず行為を辞めることはない。自身でもこのような嗜癖状態はよくないと思っているが、実際のところはやめたいとは思っていないらしい。

またTは好みのタイプの女性を明確に意識しているが、好みのタイプの女性とは関係できていない。ナンパでできた彼女も理想のタイプではなく、それゆえ不満を持ち続けているが、彼女が他の異性関係に向かうことを不安がる。彼女への貞節願望の反面、T自身は他の女性をナンパし関係することで「安心」するとも述べている。関係する特定女性への浮気の不安を複数の女性と関係することにより分散化させている。

Tがナンパを続けている理由は孤独と他者への優位性にある。会社の同僚や友人に対してナンパをできることがある程度ステータスであり、自分の優位を示せるものとして捉えている。

、Tがナンパを続けている理由はナンパのギャンブル性にあるが、これも多くのナンパ師がナンパの魅力として挙げるものである。個人差はあるがナンパは行為の性質上、多数の見知らぬ異性にアプローチしてそのごく一部としか関係できない。ゆえにナンパ師は女性が自分に対応してくれるか見極める作業を行う。Sも「ナンパは選別がほとんど」と語っている。自分に対応してくれる「行ける」女性を志向するようになる結果、好みのタイプの女性と関係できずにジレンマを抱えているのがTの場合と言える。このことは特に手練を自認しないナンパ師に多かった。また、Sによればナンパのマッチングは「同階層」の人間に起こりえることであり、好みの女性を落とすことができるというナンパ師も結局は「行ける」女性とマッチングしているに過ぎないとの見方もできる。

TもS同様にナンパを始めた動機を明確に意識していないが、理想の関係性を営めないゆえにナンパを繰り返すという意味では同様であった。

#### ■ 4-3 現代のナンパの意味～自己啓発と嗜癖、あるいは逃避～

インタビューの結果、ナンパを始めた理由やナンパの意味として多かったのは、青春時代における性愛コンプレックス（「非モテコンプレックス」と語る者が多かった）である。あ

るインタビューイはナンパの目的として、「学生時代に無視されていたギャルへの復讐」と語り、「ナンパとは女性に対する悪意」と語るものもいた。Sのように育ちや家庭への恨みを話すものもいた。

Tのようにナンパをゲームやギャンブルのように捉え、数を増やしたり、成功の確率を上げる快樂があることも続けられる理由として語るものが多かった。

論者がインタビューした21人の中には、おおよそSのような「自己の過去」にその意味を求めるものが多く、意味を自覚していない者の中ではTのような「嗜癖」的に辞められないと語るものが多く、その特徴として記述できる。

またSの述懐が興味深いのは、彼は明確な自己の出自や家への反抗としてナンパを捉えている点である。この点は1960年代までのオールドなナンパの意味と同じである。さらにSもTも他にインタビューしたナンパ師も、というよりナンパ「師」はほとんど日常的にナンパをしており、Tのように嗜癖的なものを自覚しているものいる。例えばこれらは60年代以降隆盛を極めた「消費」的なナンパとつながるものはないだろうか？

全体的にナンパ師が語るナンパの動機や意味として「気に入らない過去の自己」への対処と言えそうである。それが例えばSの場合は家族であるし、他のナンパ師では「非モテコンプレックス」であるし、「彼女どころか友だちがいなかった～中略～暗い青春」（リーマンナンパマスター:2009）であるのだ。このことは2章でも記述したように、2000年以降のブログナンパ文化に特徴的なことでもあった。かつての自分への対峙、それを「自己啓発」的な意味と呼ぶとすると、現在ナンパをしているものたちにとっての意味のひとつではないか？

そして、何かしら動機を持って始めたことが嗜癖的にやめられなくなっていることも確認された。ナンパを辞められない嗜癖的な現実は、80年代的な消費とも違うだろう。

もちろんこれらが現代なおストリートに立つ者たちの意味であると断定することはできない。なぜなら、そもそも90年代後半以降やはりナンパの意味は場所の拡散によって、見えないものになっているからである。

## ■おわりに

現代のナンパは社会によって意味付けられるものではない。ある種、さまざまな自己がそれぞれ意味を規定しているのである。

われわれの現実において、自明なものはもうなにもない。自明性の喪失自体が、全く自明になっているのだ。～中略～ 現在を生きるということは、価値のコルセットをつけて生きること、大きな理念や制度の型にはまって生きることではないのだ。人は自分が何であるかを自分で決めなければならない。（Bolz 1997 =1998:3-4）

まさに、このような現実において社会ではなく、自分で自身を規定するためにナンパ師たちがその営みをしているとすると、果たして彼らは「軟派」なのだろうか？いや、全くもってその逆ではないか？

もはや反抗する社会はない。もはや謳歌する消費もない。ラディカルな恋愛革命でもない。もはや都市に意味はない。それでも彼らは今夜も路上に立っている。いったい彼はどこから来たのか。彼は何者なのだろうか。彼の目には何が映っているのだろうか。それはもはや学問的な分析を超えて、彼自身にしか分からないものだ。本論文はその彼の過去の姿を明らかにした。しかし、彼がこれからどこへ向かうのかは分からない。彼は自分を見つめているのかも知れない。しかし、彼は間違いなくわれわれの同時代人である。

---

i これらの場合の行為もそれぞれ「ナンパ」と呼ばれることはあるが、あくまでもそ

ii ナンパ師 R 氏のインタビューより

iii ナンパ師 K 氏へのインタビューより

iv ただ、ナンパの動機はナンパ師ごとに微妙に違う。過去の女性不信を克服するためにやると言う者、面白い人に出会いたいと言う者、理由などないと言う者などさまざまである。個人によってバラつきのある動機については興味深く、別の機会を持って検討する余地がある。よって今回はあくまでもナンパ行為に共通する最も簡単な外的な目的だけを抽出することにした。ナンパにおけるとりあえずの共通目標がセックスであることに異論のあるナンパ師は少ないだろう

v ナンパ師 S 氏は、恋愛の「時短」テクニックであると証言した。

vi 例えば自身のブログに、一年間のナンパにかかった経費を計上し、報告するナンパ師もいる。(『ナンパブログ それいけ！ナンパンマン皇のストナン、クラナン、ネットナン体験談』<http://nanpaburogu.com/?p=5837>)

vii 坂口は短期的に男性とセックスする傾向のある女性がナンパに合いやすいかどうかを慎重に検討した上で、その因果関係を強く否定しないままで論を終える。しかし、ナンパ師たちはナンパについてくる女性は「見れば分かる」と述べることが多いし、そのような女性たちを〈即系〉と呼ぶことはナンパ師界では常識の用語であるから、ナンパ師たちがナンパについてくる女性たちをその外見から見抜いていることの信憑性はかなり高い。

viii ナンパの動機同様、ナンパ師によってその目的は違い、このような一般化を否定する者もいる。しかし、ナンパブログやインタビュー、ナンパコミュニティにおけるやり取りを概観すると、このような傾向が見られるのは明らかである。

ix Buss, D. M. & Schmitt, D. P., 1993. Sexual Strategies Theory: An Evolutionary Perspective on Human Mating. *Psychol Rev.*

x 同上

xi 同上

xii 『週刊サンケイ』1965年3月22日号

xiii ナンパをする際に女性の歓心を引くために派手に着飾ることはナンパテクニックとして基本的なことである。著名なアメリカのナンパ師であるミステリーとニール・ストラウスは〈ピーコック化〉として提唱しているし、論者が取材したナンパ塾「アルティマナンパ学園」の講師たちや生徒も、ナンパのときはすれ違えば誰もが振り向くレベルの派手なファッションに身を包んでいた。

xiv 『女子大生をプレイメイトに 女を知れ!』(66年2号)『女子大生が許すT・P・O/女性大性キラー・宇能鴻一郎氏の体験的発言』(67年4号)『新SEX 喫茶学入門』(69年27号)など

xv 統計局, 2015, 「平成22年基準消費者物価指数」

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001033702&cycode=0>

xvi 公益財団法人 消費者教育支援センター, 公益財団法人 生命保険文化センター, 2012 「高校生の消費生活と生活設計に関するアンケート調査報告書」

[http://www.jili.or.jp/press/2012/pdf/h24\\_hs\\_enquete\\_report.pdf](http://www.jili.or.jp/press/2012/pdf/h24_hs_enquete_report.pdf)

xvii 前出の「週刊サンケイ」の記事でも「最近、銀座は百姓がいっぱい出るよ」などという証言もあり、千葉や埼玉からわざわざ遠出してくるフーテンもいたようだ。また、1967年の時点ではフーテン族はごく一般的な家庭からも排出されていると難波功士は述べている。(難波:2007)

xviii 『週刊プレイボーイ』1974年20号

xix 1960年代にパーティー会場でナンパをしていたような記録は残っているが、見知らぬ人びとの新しい出会いというより、むしろ仲間内の集まりであったようである。(『週刊サンケイ』1965年3月22日号)

xx (『SPA!』1994年9月14号)

xxi (『週刊大衆』1999年12月13日号)

xxii 出会い系サイトが出現したのもこの頃である。(荻上:2011)

xxiii 2006年にSNSサイト「mixi」を使ってナンパしていた男性は「女性の日記を検索して、例えば『男と別れた』と書いてあれば、すぐにメッセージを送るんです。すぐに返事が来てアッサリ携帯番号を教えてくださいましたよ」と証言した。氏曰く、SNSは個人情報を大量に載せてあるので、話しを合わせるのが容易であるとのことである。

xxiv 例えばフミト・バンクの『ただでナンパするぞえ!』<http://fmtbank.seesaa.net> など。

---

xxv (sanzi:2005『即系物件』ミリオン出版)

xxvi 例えば佐々木教のような1980年当時でナンパ歴20年以上の「古株」ナンパ師になるほど、場所にこだわりはないようで、上野や銀座でナンパをしていたとの証言もあるし、現代のナンパ師についても同じようなことが言える。

xxvii 論者がインタビューしたナンパ師の中には一般的に「ナンパが一般的にチャライことくらい分かっている」という者が多数いた。しかし、必ずと言っていいほどその後に「でも、唯一無二の相手に出会うためにやっている」や「本能に従っているだけ」などのエクスキューズをセットにして語る so あった。

xxviii 『「若者の性」白書』の第2回調査(1981年)から第5回調査(1999年)にはナンパ経験率を質問した項がない。第1回、第6回、第7回には存在し、抜けた期間の経験率は推察する he ない。また、管見の限りでは他にナンパ経験率を調べた統計はない。

xxix 21人のインタビュー結果があるが、ここでは紙幅の都合上おおよそ何らかの「意味」が汲み取られるようなものを2件採用する。



## 参考文献

- NHK「日本の性」プロジェクト編, 2002, 『データブックNHK 日本人の性行動・性意識』NHK出版.
- 大沢真幸, 1996, 『性愛と資本主義』青土社.
- 荻上チキ, 2011, 『セックスメディア30年史—欲望の革命児たち』筑摩書房.
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy :Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Polity Press. (=1995, 松尾精文・松尾昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房.)
- 木村義之・小出美河子編, 2000, 『隠語大辞典』皓星社.
- 小谷野敦, 1999, 『もてない男』筑摩書房.
- , 2012, 『日本恋愛思想史—諸紀万葉から現代まで』中公新書.
- 財団法人日本性教育協会編, 1974, 『青少年の性行動』小学館.
- , 1987, 『第3回青少年の性行動』小学館.
- , 1999, 『「若者の性」白書——第5回青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- , 2005, 『「若者の性」白書——第6回青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- , 2011, 『「若者の性」白書——第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館.
- 坂口菊恵, 2009, 『ナンパを科学する——ヒトのふたつの性戦略』東京書籍.
- 桜井哲夫, 1997, 『不良少年』筑摩書房.
- 佐々木教, 1986, 『早い話がナンパの本』KKロングセラーズ.
- 小学館国語辞典編集部編, 2001, 『日本語国語大辞典第2版第10巻』小学館.
- 惣郷正明・飛田良文編, 1986, 『明治のことば辞典』東京堂出版.
- 武田隆, 2011, 『ソーシャルメディア進化論』ダイヤモンド社.
- 難波功士, 2007, 『族の系譜学——ユース・サブカルチャーの戦後史』青弓社.
- 新村出編, 2008, 『広辞苑第6版』岩波書店.
- 日本性教育協会編, 2013, 『「若者の性」白書』小学館.

- Buss,D.M,1994, *The Evolution of Desire: Strategies of Human Mating*. Newbury Park,NJ:Sage Publication. (=2000, 狩野秀之訳, 『女と男のだましあい——ヒトの性行動の進化』草思社.)
- Buss,D.M&Schmitt,D.P,1993. *Sexual Strategies Theory: an Evolutionary Perspective on Human Mating*. Psychol Rev.
- Heath, Joseph, and Andrew Potter, 2006, *The Rebel Sell: How the Counterculture Became Consumer Culture*. Chichester: Capstone. (=2014, 栗原百代訳『反逆の神話——カウンターカルチャーはいかにして消費文化になったか』NTT出版.)
- 服藤早苗・山田昌弘・吉野晃編, 2002, 『恋愛と性愛』早稲田大学出版部.
- Bolz Norbert, 1997, *Die Sinngesellschaft*. Düsseldorf. (=1998, 村上淳一訳『意味に植える社会』東京大学出版.)
- 松村明編, 2012, 『大辞泉第2版下巻 せーん』小学館.
- 見田宗介, 2006, 『社会学入門——人間と社会の未来』岩波書店.
- 宮台真司, 2006, 『制服少女たちの選択』朝日新聞出版.
- 宮台真司・石原英樹・大塚明子, 2007, 『増補 サブカルチャー神話解体——少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』ちくま書房.
- 柳父章, 1982, 『翻訳後成立事情』岩波書店.
- 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄編, 2005, 『新明解国語辞典第6版』三省堂.
- 山田昌弘, 1996, 『結婚の社会学』丸善.
- 米川明彦編, 2003, 『日本俗語大辞典』当共同出版.
- 吉見俊哉, 2008, 『都市のドラマトウルギー——東京・盛り場の社会史』河出書房新社.
- リーマンナンパマスター, 2009, 『もう合コンに行くな』KKベストブックス.

#### 【引用雑誌】

- アサヒ芸能 1994年3月24日号 「ツーショットの達人が明かすテレホンナンパの極意」
- 週刊サンケイ 1965年3月22日号 「新風俗調査 ショック！銀座サーキット ”ナンパ” を狙うマッハ族とフーテン部隊」
- 週刊女性 2001年5月1日号 「実録 俺は女をこうやっておとす」

週刊大衆 2007年5月臨時増刊 「極悪ナンパ闇商人の非道手口」  
週刊読売 1992年7月12日号 「千葉版ベイブリッジのアツイ夜」  
週刊宝石 1983年8月12日号 「東京大阪いい女地図」 jk  
スコラ 1994年12月8日号 「マルチメディアSEX縦横無尽」  
SPA! 2000年5月31日号 「ネットナンパ師のテクに見るE恋愛の真実」  
— 2001年9月19日号 「必ず会えるケータイメール講座」  
— 2003年11月11日号 「ナンパビジネス最前線を追う」  
— 2006年3月14日号 「大阪でナンパ 悪戦苦闘リポート」  
Title 2001年3月号 「実録ネットナンパ達人への道」  
ダカーポ 1998年8月19日号 「その気にさせるネットナンパ文章術」  
武俠世界 1913年10月臨時號 轅川逸客「白昼公然社会を横行する不良少年」  
—— 1915年4月臨時號 鎮唯劍客「墮落学生の硬派軟派」長髮逸士「全國  
不良學生概観」  
FRYDAY増刊 2000年3月27日号 「インターネットでナンパに挑戦」  
プレイボーイ 1978年10月17日号 「ハードボイルドナンパ格言文庫」  
ヤングレディ 1984年7月10日号 「性風俗体験レポート」  
鹿島茂, 2003, 『オール読物 とは知らんなんだ56「軟派と硬派」』2003年4月号  
『週刊サンケイ 新風俗調査 ショック! 銀座サーキット”ナンパ”を狙うマ  
ッハ族とフーテン部隊』1965年3月22日号

#### 【ウェブサイト】

公益財団法人 消費者教育支援センター, 公益財団法人 生命保険文化センター,  
2012「高校生の消費生活と生活設計に関するアンケート調査報告書」  
[http://www.jili.or.jp/press/2012/pdf/h24\\_hs\\_enquete\\_report.pdf](http://www.jili.or.jp/press/2012/pdf/h24_hs_enquete_report.pdf)

統計局, 2015, 「平成 22 年基準消費者物価指数」  
<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?bid=000001033702&cycdo=0>